【高知大学=ベネッセ教育総合研究所共同研究】

# 高知大学
# 卒業生調査分析結果

2020年３月31日（火）

高知大学　　大学教育創造センター
ベネッセ教育総合研究所　　木村治生

【Contents】

1　研究の目的・調査の概要

2　先行調査(ベネッセ調査)との比較

3　卒業生調査の詳細分析

4　まとめ―成果と課題

# ◆共同研究の位置づけ

テーマV（質保証）　大学名：高知大学
質保証の基盤構築に向けた「地域協働による教育」の多面的評価指標の実践的検証

高知大学 Kochi University

IRを用いた学長の強固なリーダーシップの下の３つの大きな取組

**Ⅰ．教育改革に向けた意識改革（対象：全教職員）**

入口と出口を見つめ教職協働を強化する【授業公開週間／FD・SDウィーク】
授業公開週間（＝FD・SDウィーク）　全員参加
高大社接続の視点からの公開授業と授業協議会の実施
全教学IRのデータを用いて質保証に関わる
全学と学部FDの強化（GPAの厳正化）
教育奨励賞や授業改善記録を
教員の教育業績評価とし人事考課に活用
授業外学修時間の拡大
ラーニングコモンズの充実

教員のファシリテーション力向上
アクティブ・ラーニング型授業の強化

**ディプロマ・ポリシーに基づく教育活動の加速**

「地域協働による教育」
地域に出向き地域の課題を解決する取組のなかで、DP「統合・働きかけ」を育成する。現実課題に向き合うことは、学生のキャリア形成にとって、大変重要な役割を果たす。

**Ⅱ．多面的評価指標を外部と共同開発（対象：全学生）**

DPに基づく多面的評価指標

| ポリシーの分類 | 具体的な能力 | | 評価方法 | メタ・コンピテンシー（評価方法） |
|---|---|---|---|---|
| 【知識・理解】 | 対課題 | 専門分野に関する知識 | GPA | 【統合・働きかけ】左記の諸能力を内的に統合し、周囲の文化・社会・自然・人間などに外的に働きかけていく能力 |
| | | 人類の文化・社会・自然に関する知識 | | |
| 【思考・判断】 | | 論理的思考力 | | |
| | | 課題探求力 | | |
| | | 倫理・情報に関するリテラシー | | |
| 【技能・表現】 | 対人 | 表現力 | ルーブリック評価（フィールドである地域と協働して開発） | パフォーマンス評価（苦手社会人等を含む学外の人材と協働して開発） |
| | | コミュニケーション力 | | |
| 【関心・意欲・態度】 | | 協働実践力 | | |
| | 対自己 | 自己管理力 | | |
| | | 倫理観 | | |

学修成果の可視化
ディプロマ・サプリメント
学生にわかりやすい成績を表示
学修ポートフォリオ

高知大学 KULAS 教育支援システム

**Ⅲ．学生の成長を地域と社会と協働して検証する（対象：全学生と卒業生）**

出口の課題を徹底的に検証し分析
・卒業生とその就職先等への調査と検証（インタビュー調査と質問紙調査）

ルーブリック評価指標
・パフォーマンス評価指標の開発
（社会に近いオーセンティックな評価軸で学生を視る）
若手社会人を含む外部者と協働し開発

■外部評価委員会：入口（高大接続）と出口（大社接続）を意識した構成
高等学校教員　卒業生
県教育委員会／教育センター　在学生の保護者
高知県内の卒業生就職先企業　東京に本社を持つ卒業生就職先
経済同友会／商工会議所　高等教育の有識者

■内部体制：自己点検評価
大学教育再生加速プログラム事業実施本部
教学IR…大学教育創造センター内
（本事業のデータの一元管理と検証）
全学IR…IR・評価機構

学生支援型の形成的評価の設定
【学生支援力強化】
＝学生総合支援センターとの連携
・年度末の個別面談の実施
・成績不振者や修学支援を必要とする学生の早期発見システム
・リフレクション・セメスターの設定（キャリア形成に向けた支援強化）

**卒業生を対象にした調査により、高知大学での学びの成果と課題を検証する**



# ◆共同研究の全体像

●AP事業計画書「卒業生とその就職先を対象にした調査研究」より

研究Ⅱ(ベネッセ教育総合研究所との共同研究)

**1．卒業生インタビュー調査（平成29年度）**
対象：既卒者および平成28年卒業生（首都圏と高知県内）
その就職先企業の上司･同僚･人事担当者
内容：インタビュー調査
方法：既卒者は就職企業リストから選択してアプローチ
卒業生のセグメントを行いインタビューリストを作成

**2．1の対象者の在学中の学修成果検証（平成29年度）**
対象：インタビュー調査に回答した卒業生
内容：卒業生調査と就職先調査、および学修成果

**3．WEBアンケート調査（平成30年度）**
対象：卒業生（県内・首都圏比較）
内容：活躍の程度、大学･暮らしの満足度、大学教育の評価

★設問の一部をベネッセ教育総合研究所の先行調査と比較できるように設計し、
質保証の観点から、全国的な傾向と比較するため、先行調査をベンチマークとし検証した。

質的調査から仮説を抽出
↓
量的調査から仮説を検証

**1と2は平成30年度に報告済み、このレポートでは3について報告**

※1と2については、2018年12月7日（金）平成30年度高知大学AP事業シンポジウム&ポスターセッションにおける資料、高知大学が発行する「文部科学省大学教育再生加速プログラム　事業報告書（平成30年度）」（p.136-141）を参照。

## ◆共同研究の目的

# 学びと成長の可視化のモデルづくり

## 卒業生と就職先を対象とした WEBアンケートの開発

卒業生の地域社会での活躍に大学がどれだけ貢献できているのかを継続的に測定し、教育施策を改善するためのサイクルをつくる

**調査内容**

①大学でどのような学びを経験したのか
②大学での学びでどのような資質･能力を身につけたのか
③大学での学びをどのように評価しているのか

**検証観点**

①経験⇔資質･能力⇔評価の関連から、どのような教育施策が資質･能力を高めるのに有効なのかを検討する
②検証する軸を一定にすることで、経年変化をとらえる
③就職先の違い(県内･県外)から、卒業生の地域での活躍をとらえる



## ◆評価の軸となる能力指標

### ディプロマ・ポリシーに基づいた「１０＋１」の能力指標

| ディプロマ ポリシーの分類 | 具体的な能力 | | 評価方法 |
|---|---|---|---|
| 【知識・理解】 | 対課題 | 専門分野に関する知識 | GPA |
| | | 人類の文化・社会・自然に関する知識 | |
| 【思考・判断】 | | 論理的思考力 | ルーブリックによる学生の自己評価 |
| | | 課題探求力 | |
| 【技能・表現】 | | 語学・情報に関するリテラシー | |
| | 対人 | 表現力 | |
| | | コミュニケーション力 | |
| 【関心・意欲・態度】 | | 協働実践力 | |
| | 対自己 | 自律力 | |
| | | 倫理観 | |
| 統合・働きかけ | 上記の諸能力を内的に統合し、周囲の文化･社会･自然･人間などに外的に働きかけていく能力 | | パフォーマンス評価 |

●高知大学による独自開発。在校生に対しては「セルフ・アセスメント・シート」→ルーブリックとして学修成果の自己評価などに利用。

●今回の卒業生/就職先調査でも、同じ評価の軸として取り入れる。

# ◆質問紙調査の概要



**【調査目的】**

①学士課程を終えて就職や進学をした卒業生の大学に対する満足度・成長の振り返り、社会で役立っている実感等を把握することで、高知大学の学士課程における質保証に係るデータを収集する。

②他大学のデータと比較することで、高知大学が実現する学びの特徴や成果と課題を検証する。

**【調査期間】**

●2018年12月～2019年1月

**【調査対象】**

●2018年３月に高知大学を卒業した卒業生
●送付数……1,059名
●回収数……404名（回収率38.1%）

男子：180、女子：224
人文学部：100、教育学部：82、理学部：100、農学部：48、医学部：71、土佐さきがけ：3

**【調査方法】**

●郵送による依頼、WEBによる回答

在学時の保護者住所に卒業生本人宛で郵送による依頼を行い、アンケート回答の専用WEBページにアクセスしてもらい回答してもらった



# ◆質問紙調査の内容



**①基本属性**

●入学前の居住地（都道府県）
●現在の居住地（都道府県）
●職業（就業状況、業種･職種、規模）
●大学志望度

※性別、入学年度、学科･課程･コース、入試方法については学内データを利用

**②高知に対する愛着**

●高知や高知大学に対する愛着
●高知ならではの学びや触れ合い
●高知への貢献意識
●高知への定住や帰郷の意識　　など

**③学びの機会**

●主体的な学びの機会、指導・評価の機会、学びの発展の機会
●情緒的サポート、深い学び

**④資質・能力**

●論理的思考力
●課題探求力
●表現力
●コミュニケーション力
●協働実践力
●自律力
●倫理観
●統合・働きかけ

セルフ・アセスメント・シート

**⑤大学満足度**

●正課教育
●準正課活動、正課外活動
●学生生活支援
●施設
●大学に対する総合満足

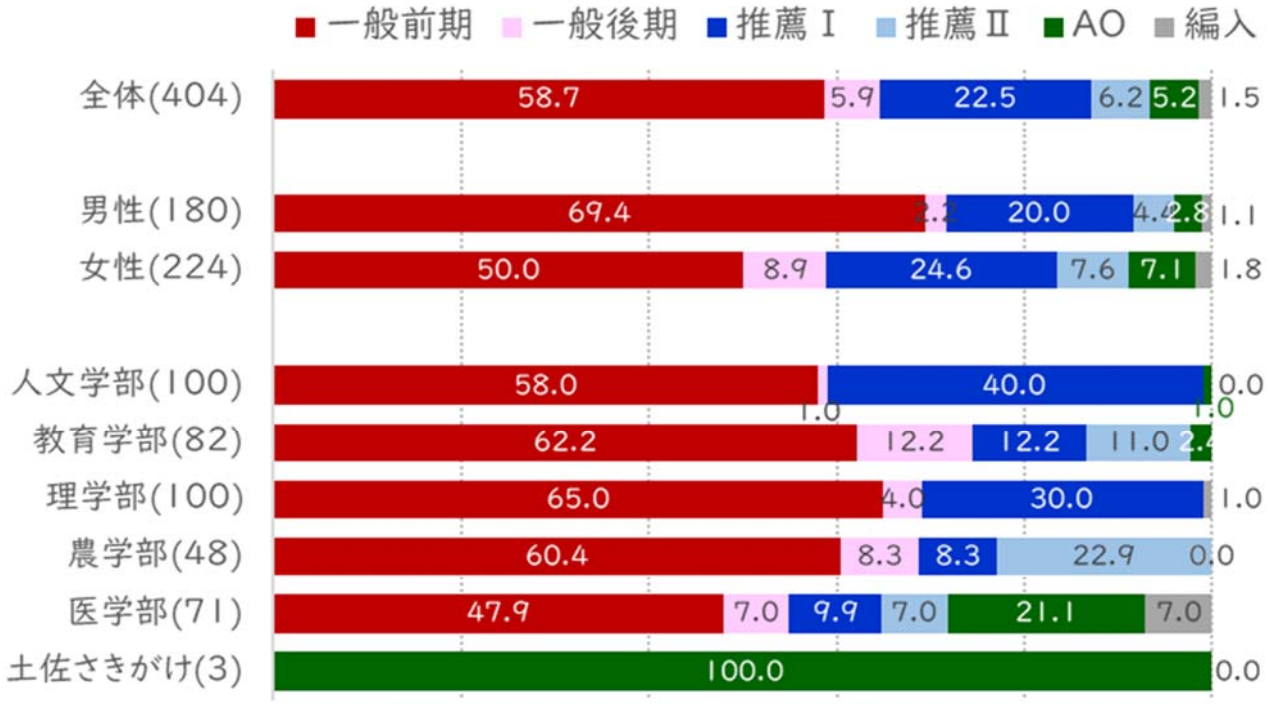
**⑥自己効力感**

●成長実感
●卒業後の自己効力感

# ◆入試形態



●全体の64.6%が一般入試、33.9%が推薦入試・AO入試による入学
●一般入試は男子に多く、推薦入試・AO入試は女子に多い

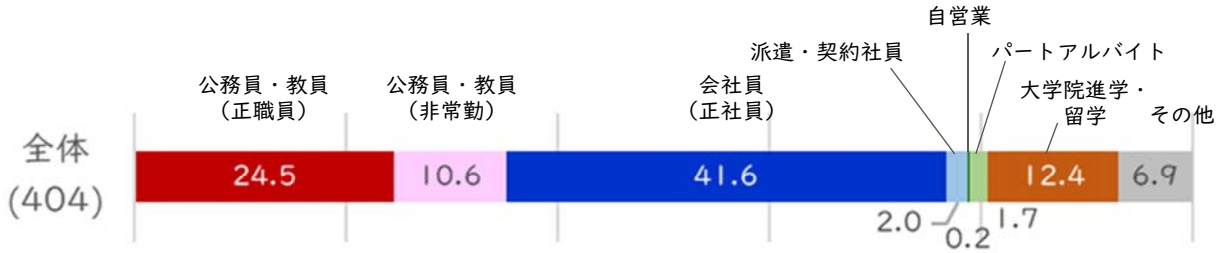





# ◆職業



●35.1%が公務員･教員（非常勤を含む）、43.6%が会社員（契約･派遣社員を含む）
●人文学部は会社員、教育学部は公務員･教員、理学部･農学部は大学院進学が多い



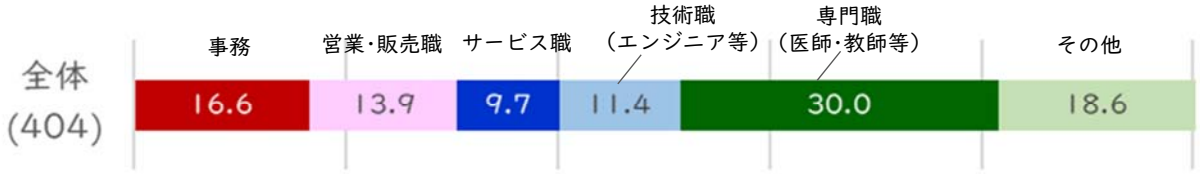

| | 全体 | 性別 | | 学部 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 全体(404) | 男性(180) | 女性(224) | 人文学部(100) | 教育学部(82) | 理学部(100) | 農学部(48) | 医学部(71) | 土佐さきがけ(3) |
| 公務員・教員（正職員） | 24.5 | 23.3 | 25.4 | 24.0 | 42.7 | 13.0 | 10.4 | 31.0 | 0.0 |
| 公務員・教員(非常勤・臨時職員) | 10.6 | 13.9 | 8.0 | 4.0 | 13.4 | 11.0 | 2.1 | 22.5 | 0.0 |
| 会社員（正社員） | 41.6 | 35.0 | 46.9 | 61.0 | 30.5 | 44.0 | 47.9 | 18.3 | 66.7 |
| 派遣社員・契約社員 | 2.0 | 1.1 | 2.7 | 2.0 | 1.2 | 3.0 | 2.1 | 1.4 | 0.0 |
| 自営業・家族従業者 | 0.2 | 0.6 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2.1 | 0.0 | 0.0 |
| パート・アルバイト | 1.7 | 1.7 | 1.8 | 2.0 | 0.0 | 3.0 | 4.2 | 0.0 | 0.0 |
| 大学院進学・留学 | 12.4 | 17.2 | 8.5 | 5.0 | 8.5 | 24.0 | 25.0 | 2.8 | 0.0 |
| 専業主婦・専業主夫 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| その他 | 6.9 | 7.2 | 6.7 | 2.0 | 3.7 | 2.0 | 6.3 | 23.9 | 33.3 |

※平均よりも10%を超えるものに ○ 、5%を超えるものに ⬭ をつけた
※土佐さきがけは少数のため印をつけていない

# ◆職種



●全体では専門職が30.0%と最も多く、事務職、営業･販売職がそれに続く
●人文学部は事務職、教育学部･医学部は専門職、理学部･農学部は技術職が多い




| | 全体 | 性別 | | 学部 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 全体 (404) | 男性 (180) | 女性 (224) | 人文学部 (100) | 教育学部 (82) | 理学部 (100) | 農学部 (48) | 医学部 (71) | 土佐さきがけ(3) |
| 事務 | 16.6 | 9.4 | 22.3 | 36.0 | 14.6 | 13.0 | 12.5 | 0.0 | 0.0 |
| 営業・販売職 | 13.9 | 12.8 | 14.7 | 32.0 | 11.0 | 12.0 | 6.3 | 0.0 | 0.0 |
| サービス職 | 9.7 | 8.3 | 10.7 | 13.0 | 9.8 | 11.0 | 8.3 | 2.8 | 33.3 |
| 技術職（エンジニア等） | 11.4 | 13.9 | 9.4 | 7.0 | 1.2 | 20.0 | 37.5 | 0.0 | 0.0 |
| 専門職（医師、教師等） | 30.0 | 28.3 | 31.3 | 5.0 | 43.9 | 11.0 | 6.3 | 93.0 | 0.0 |
| その他 | 18.6 | 27.2 | 11.6 | 7.0 | 19.5 | 33.0 | 29.2 | 4.2 | 66.7 |

※平均よりも10%を超えるものに ○ 、5%を超えるものに ◌ をつけた
※土佐さきがけは少数のため印をつけていない

高知大学 Kochi University　ベネッセ教育総合研究所

# ◆業種



●全体では教育･学習支援業、医療・福祉が10%を超える
●人文学部は公務、教育学部が教育･学習支援業、農学部は農、林、漁、鉱業が多い

| | 全体 | 性別 | | 学部 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 全体 (404) | 男性 (180) | 女性 (224) | 人文学部 (100) | 教育学部 (82) | 理学部 (100) | 農学部 (48) | 医学部 (71) | 土佐さきがけ(3) |
| 農、林、漁、鉱業 | 3.7 | 3.3 | 4.0 | 1.0 | 0.0 | 1.0 | 27.1 | 0.0 | 0.0 |
| 建設業 | 1.5 | 1.7 | 1.3 | 0.0 | 2.4 | 3.0 | 2.1 | 0.0 | 0.0 |
| 製造業 | 7.2 | 6.1 | 8.0 | 9.0 | 7.3 | 10.0 | 8.3 | 0.0 | 0.0 |
| 電気・ガス・熱供給・水道業 | 0.7 | 1.7 | 0.0 | 2.0 | 1.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 情報通信業 | 4.7 | 6.1 | 3.6 | 6.0 | 0.0 | 9.0 | 6.3 | 0.0 | 33.3 |
| 運輸業、郵便業 | 0.5 | 0.6 | 0.4 | 1.0 | 0.0 | 1.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 卸売・小売業 | 6.7 | 4.4 | 8.5 | 17.0 | 6.1 | 4.0 | 2.1 | 0.0 | 0.0 |
| 金融・保険業 | 8.4 | 5.0 | 11.2 | 17.0 | 7.3 | 10.0 | 2.1 | 0.0 | 0.0 |
| 不動産業、物品賃貸業 | 0.7 | 0.6 | 0.9 | 2.0 | 0.0 | 1.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 学術研究、専門・技術サービス業 | 4.5 | 5.0 | 4.0 | 4.0 | 1.2 | 7.0 | 10.4 | 1.4 | 0.0 |
| 宿泊業、飲食サービス業 | 1.5 | 2.2 | 0.9 | 1.0 | 1.2 | 2.0 | 4.2 | 0.0 | 0.0 |
| 教育、学習支援業 | 18.3 | 20.0 | 17.0 | 6.0 | 53.7 | 18.0 | 2.1 | 5.6 | 33.3 |
| 医療、福祉 | 17.6 | 14.4 | 20.1 | 2.0 | 2.4 | 2.0 | 2.1 | 90.1 | 0.0 |
| 公務 | 9.7 | 10.6 | 8.9 | 24.0 | 3.7 | 9.0 | 4.2 | 1.4 | 0.0 |
| その他サービス業 | 3.0 | 1.7 | 4.0 | 1.0 | 3.7 | 4.0 | 6.3 | 0.0 | 33.3 |
| その他 | 11.4 | 16.7 | 7.1 | 7.0 | 9.8 | 19.0 | 22.9 | 1.4 | 0.0 |

※20%を超えるものに ○ 、10%を超えるものに ◌ をつけた
※土佐さきがけは少数のため印をつけていない

## ◆移動パタン



●県内出身者は約25%で、女子に多い。男子は「県外出身→県内就職」の比率が高い。
●流出（県内→県外）よりも流入（県外→県内）のほうが約５ポイント多い。

| | | 全体 | 性別 | | 学部 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全体 (404) | 男性 (180) | 女性 (224) | 人文学部 (100) | 教育学部 (82) | 理学部 (100) | 農学部 (48) | 医学部 (71) | 土佐さきがけ(3) |
| 出身 | 県外出身 | 75.2 | 82.8 | 69.2 | 71.0 | 78.0 | 83.0 | 81.3 | 64.8 | 33.3 |
| | 県内出身 | 24.8 | 17.2 | 30.8 | 29.0 | 22.0 | 17.0 | 18.8 | 35.2 | 66.7 |
| 就職 | 県外就職 | 70.0 | 71.1 | 69.2 | 66.0 | 70.7 | 72.0 | 77.1 | 66.2 | 100.0 |
| | 県内就職 | 30.0 | 28.9 | 30.8 | 34.0 | 29.3 | 28.0 | 22.9 | 33.8 | 0.0 |
| 移動 | 県外出身→県外就職 | 64.1 | 67.2 | 61.6 | 62.0 | 64.6 | 68.0 | 70.8 | 57.7 | 33.3 |
| | 県外出身→県内就職 | 11.1 | 15.6 | 7.6 | 9.0 | 13.4 | 15.0 | 10.4 | 7.0 | 0.0 |
| | 県内出身→県外就職 | 5.9 | 3.9 | 7.6 | 4.0 | 6.1 | 4.0 | 6.3 | 8.5 | 66.7 |
| | 県内出身→県内就職 | 18.8 | 13.3 | 23.2 | 25.0 | 15.9 | 13.0 | 12.5 | 26.8 | 0.0 |

※平均よりも10%を超えるものに ○ 、5%を超えるものに ◌ をつけた
※土佐さきがけは少数のため印をつけていない



【Contents】

1　研究の目的・調査の概要

2　先行調査(ベネッセ調査)との比較

3　卒業生調査の詳細分析

4　まとめ―成果と課題

## ◆分析の枠組み



●以下では、高知大学の卒業生を対象にした調査とベネッセ教育総合研究所が実施した先行調査との比較から、高知大学の卒業生の特徴を明らかにする。

★とくに、ベネッセ調査全体や地方･国公立大学との数値の差異に注目する。

→調査概要はp.7

→調査概要はp.16



## ◆参考とする調査の概要



**【参考とする調査】**

●ベネッセ教育総合研究所「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」
※以下では、BC調査と表記

**【調査テーマ】**

●大学での学びと成長についての意識や実態

**【調査期間】**

●2015年3月

**【調査対象】**

●23～34歳、40～55歳の日本の短期大学、4年制大学、6年制大学卒業の学歴を持つ者。 インターネット調査会社のモニター母集団約588万人の中から、最終学歴が、短期大学、４年制大学卒業の者を抽出して調査を依頼。

●回収数……19,833名 （23～34歳：11,613名、40～55歳：8,220名）

★本分析では、30歳以下の5,982名を比較対象とした。

都市･国公立556名、地方･国公立974名、都市･私立3,392名、地方･私立1,060名
※都市は、東京、神奈川、千葉、埼玉、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡の各都府県

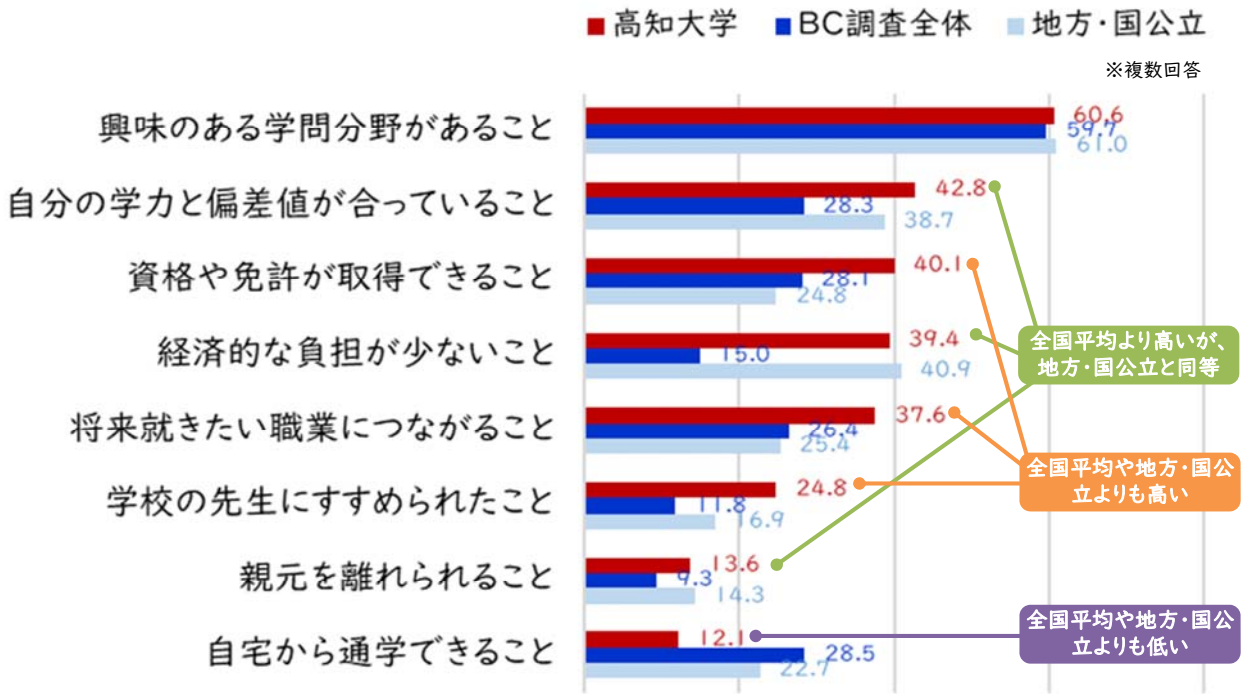
**【調査方法】**

●インターネット調査

## ◆大学進学理由①



●トップは「興味のある学問分野」の6割で、ほぼ全国平均と同等
●「資格や免許が取得できる」「将来就きたい職業につながる」が全国平均より高い

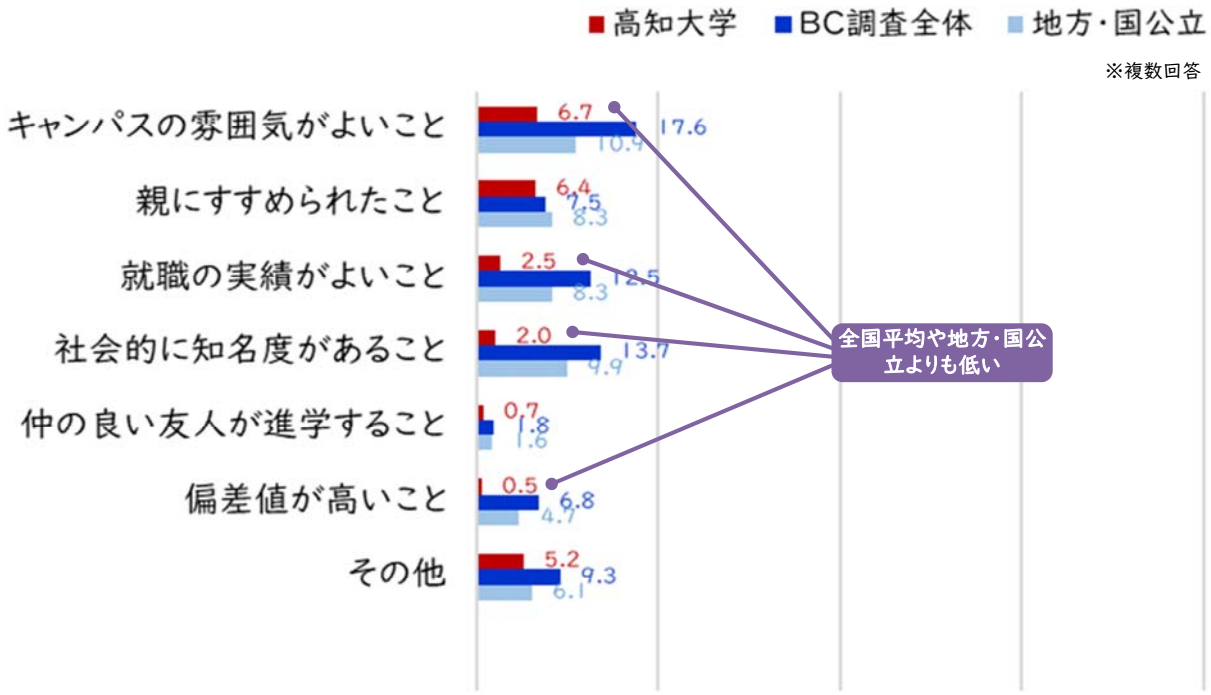





## ◆大学進学理由②



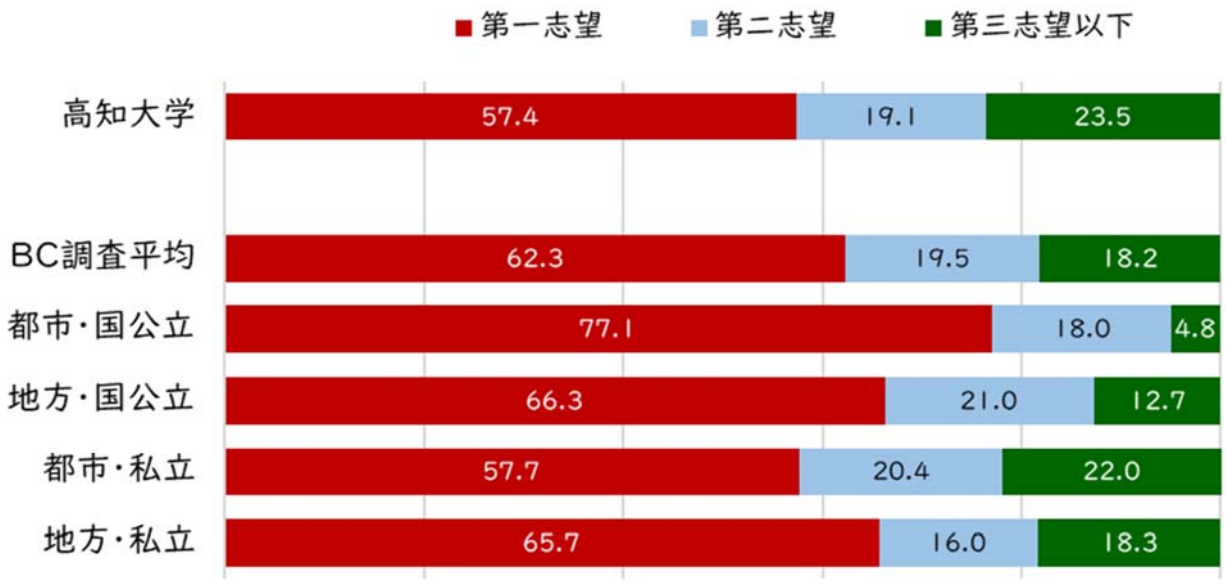
●「就職の実績がよい」「社会的に知名度がある」「偏差値が高い」などは、
全国平均や他の地方・国公立大学平均よりも低い



## ◆大学志望度



●「第一志望」の比率は、BC調査の平均よりも約5ポイント、地方・国公立平均よりも約9ポイント低い

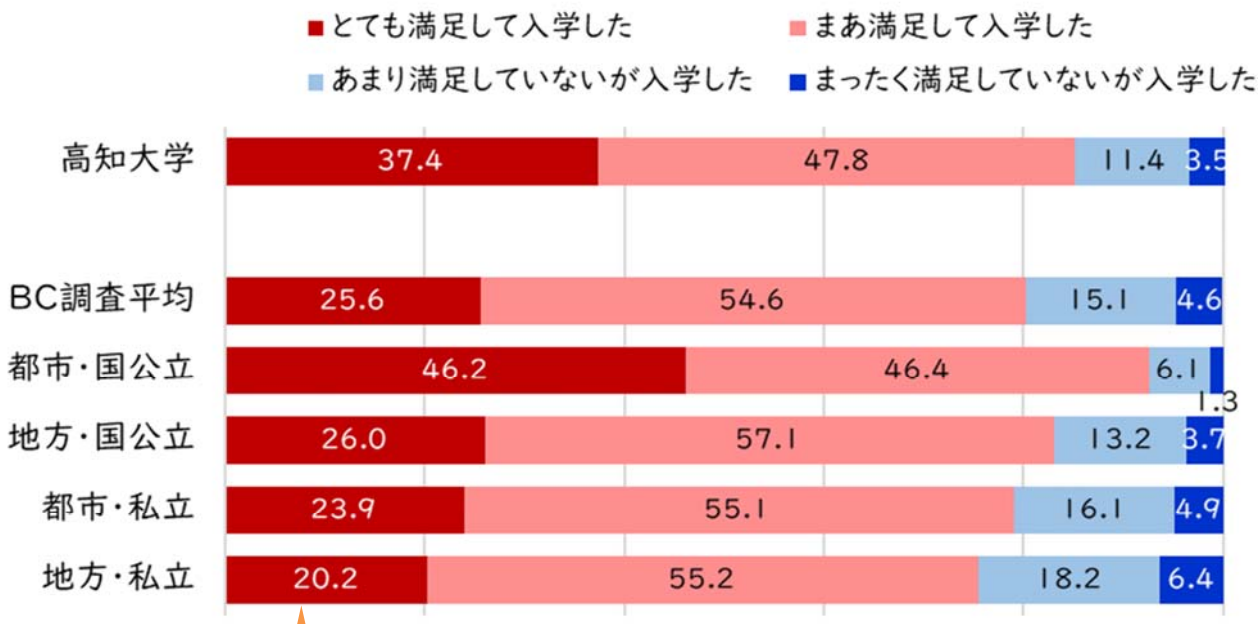





## ◆入学満足度



●「とても満足」は、BC調査平均や地方・国公立平均よりも10ポイント以上高い

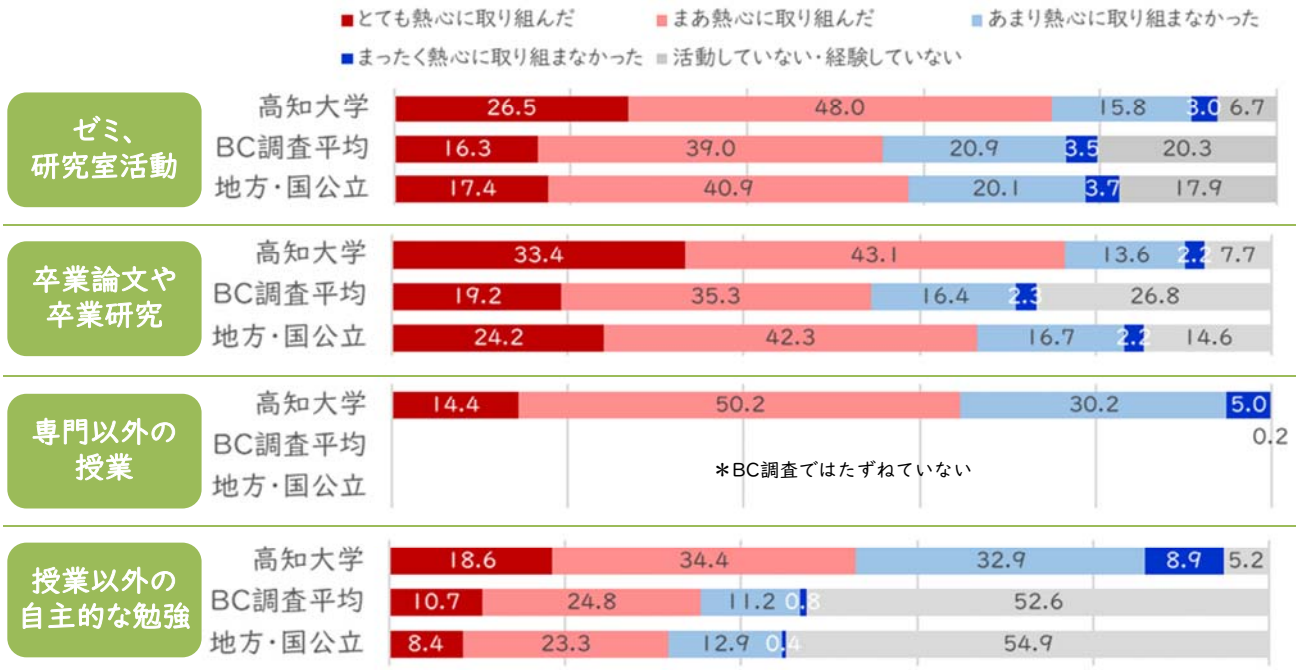



全国平均や他の地方国公立大学と比べて「第一志望」の比率は低いが、入学満足は高い

# ◆大学での取り組み①



●「ゼミ、研究室活動」「卒業論文や卒業研究」「授業以外の自主的な勉強」のいずれも、「熱心に取り組んだ」は全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。



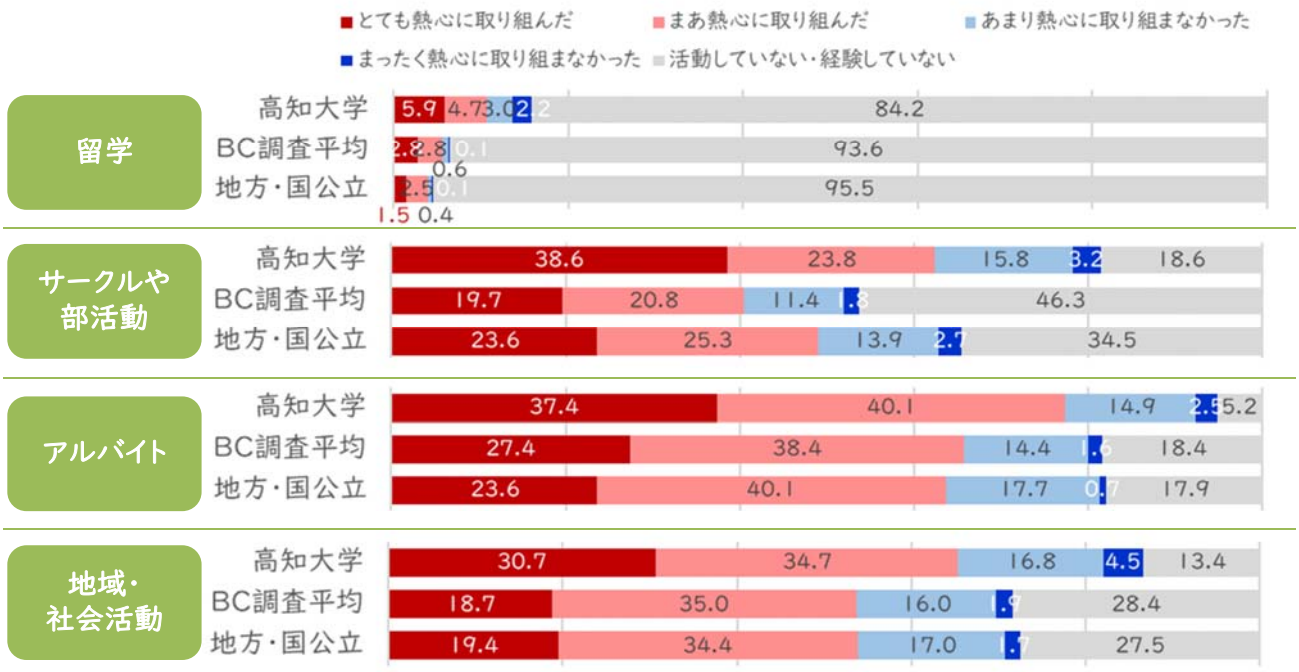

※BC調査では、大学時代に該当の活動を経験したかどうかをたずねたのちに、選択したものについて「とても力を入れた」～「まったく力を入れなかった」の4段階で回答してもらった。上記は、経験について選択しなかったケースを「活動していない・経験していない」とした。



# ◆大学での取り組み②



●「留学」「サークルや部活動」「アルバイト」「地域・社会活動」のいずれも、「熱心に取り組んだ」は全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。

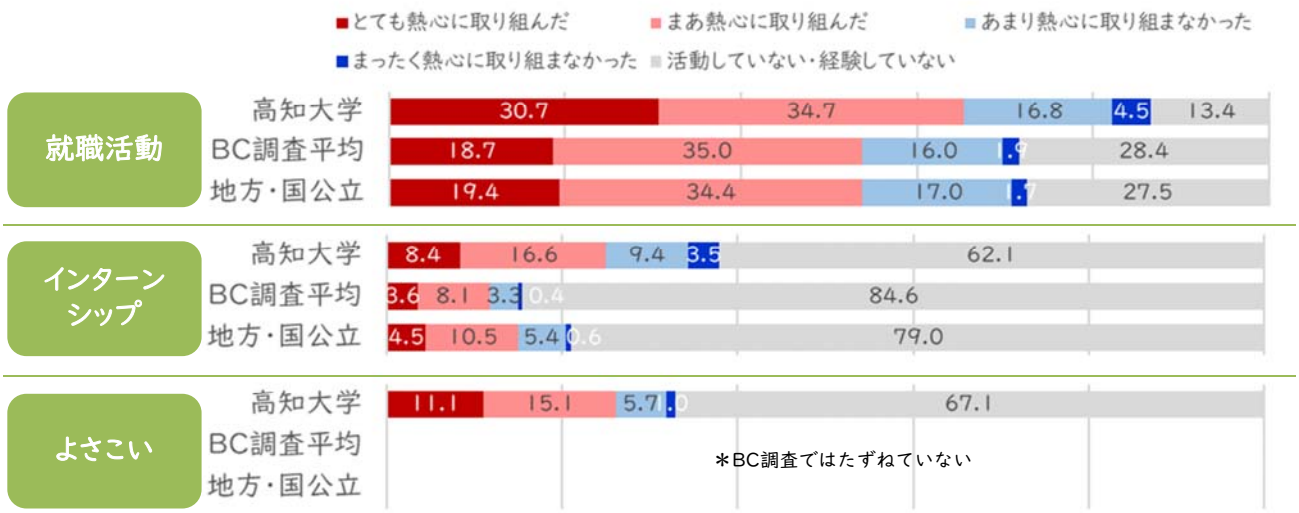



※BC調査では、大学時代に該当の活動を経験したかどうかをたずねたのちに、選択したものについて「とても力を入れた」～「まったく力を入れなかった」の4段階で回答してもらった。上記は、経験について選択しなかったケースを「活動していない・経験していない」とした。

## ◆大学での取り組み③



●「就職活動」「インターンシップ」のいずれも、「熱心に取り組んだ」は全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。




※BC調査では、大学時代に該当の活動を経験したかどうかをたずねたのちに、選択したものについて「とても力を入れた」～「まったく力を入れなかった」の4段階で回答してもらった。上記は、経験について選択しなかったケースを「活動していない・経験していない」とした。

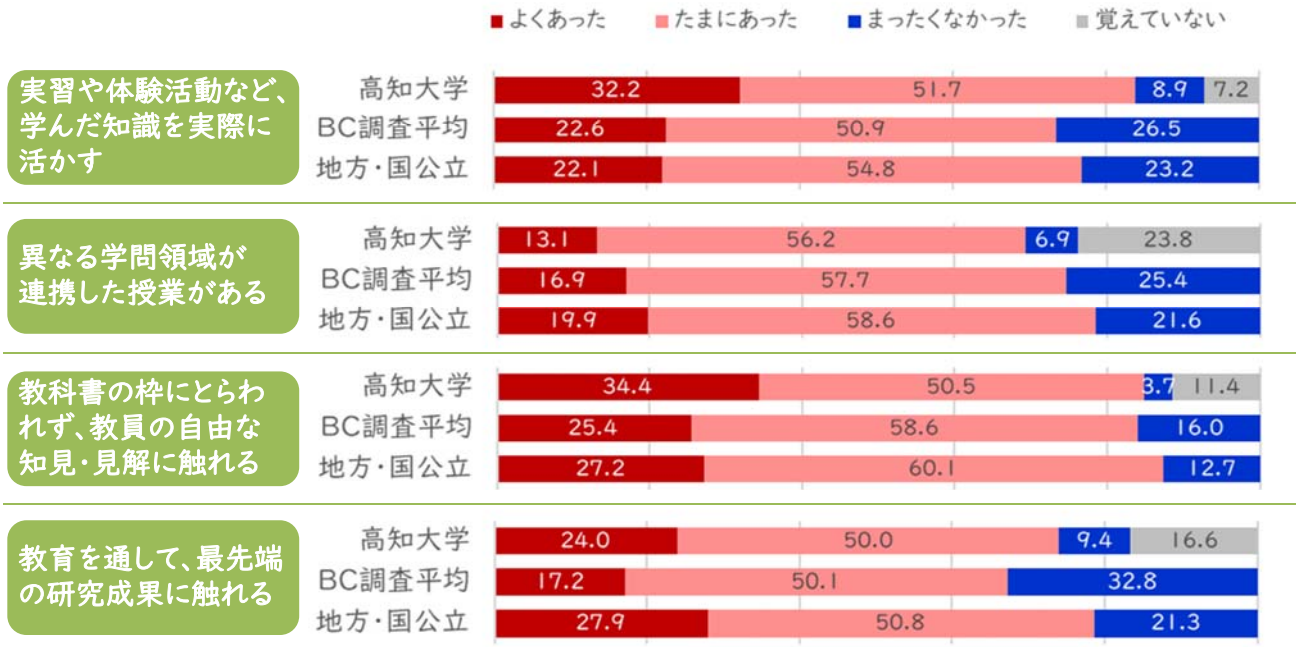
**高知大学の学生は、すべての項目で「とても熱心に取り組んだ」が高いなど、大学時代に多様な活動を経験していたことが分かる**



## ◆学問の経験①



●「実習や体験活動など、学んだ知識を実際に活かす」「教科書の枠にとらわれず、教員の自由な知見・見解に触れる」で、「よくあった」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。

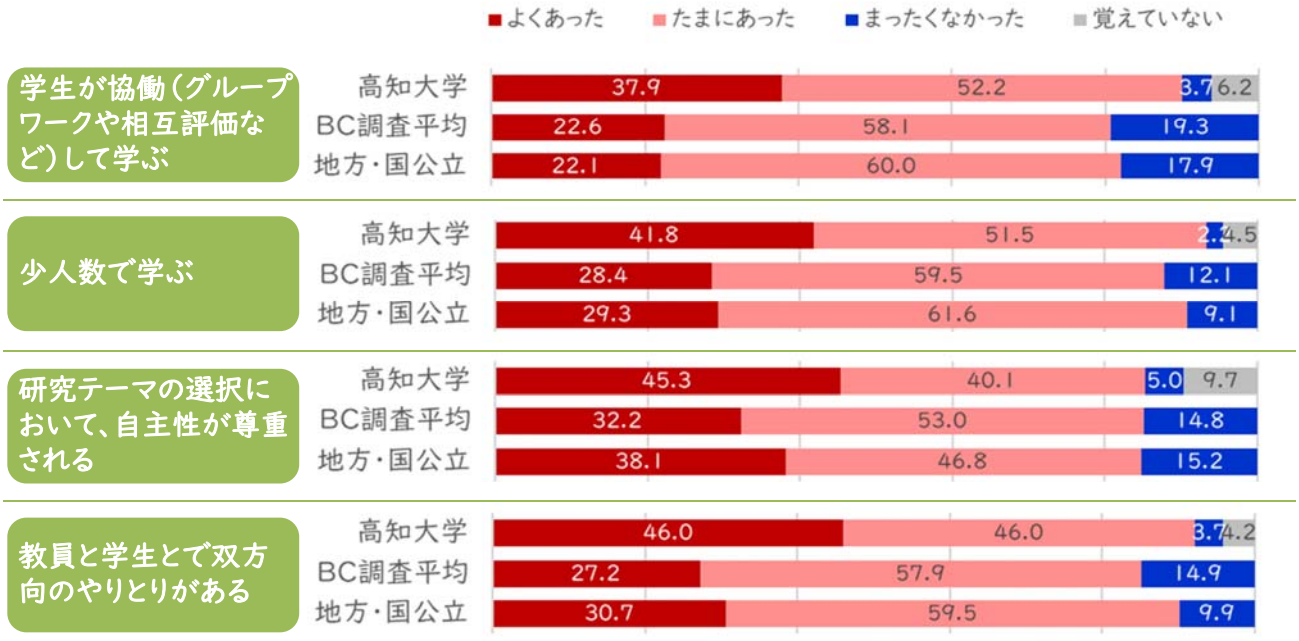



※BC調査では、「覚えていない」を選択肢に設けていない。

## ◆学問の経験②



● 「学生が協働して学ぶ」「少人数で学ぶ」「研究テーマの選択において、自主性が尊重される」「教員と学生とで双方向のやりとりがある」のいずれも、「よくあった」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。



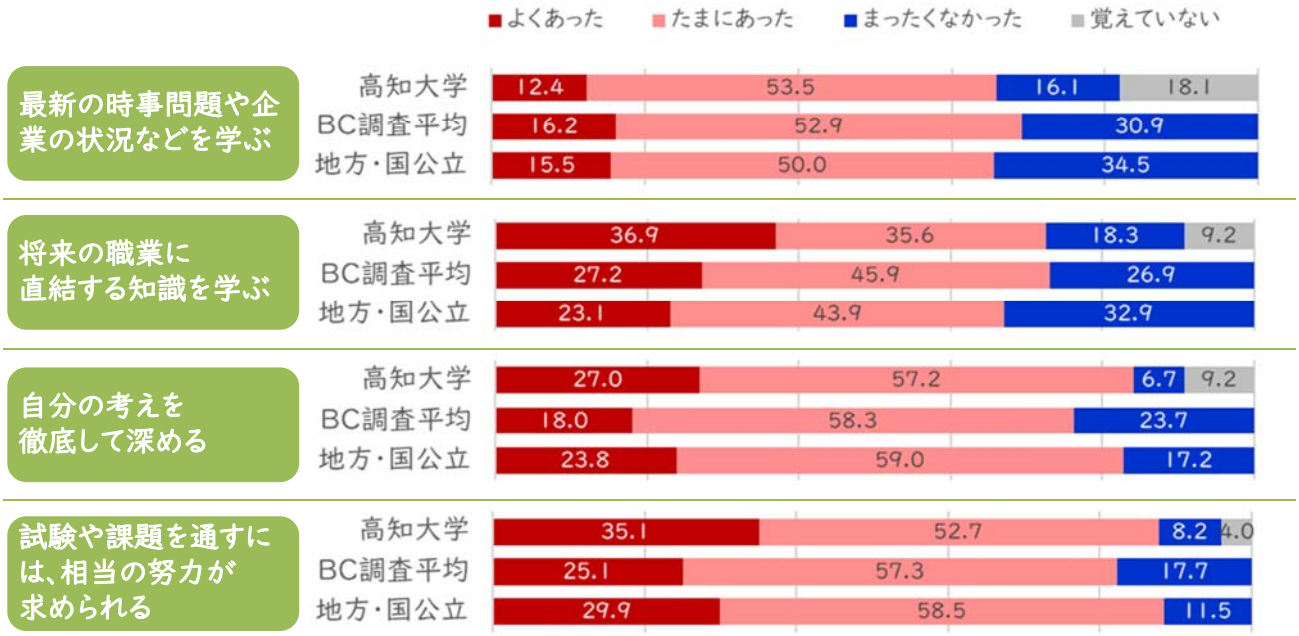

※BC調査では、「覚えていない」を選択肢に設けていない。

高知大学 Kochi University　ベネッセ教育総合研究所

## ◆学問の経験③



● 「将来の職業に直結する知識を学ぶ」「試験や課題を通すには、相当の努力が求められる」で、「よくあった」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。

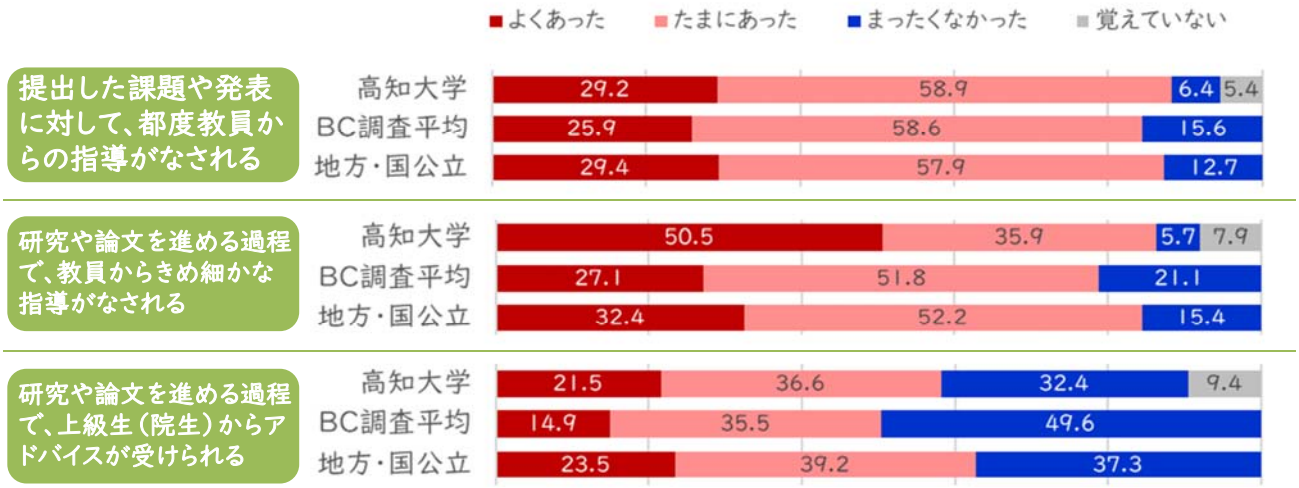



※BC調査では、「覚えていない」を選択肢に設けていない。

## ◆学問の経験④



●「研究や論文を進める過程で、教員からきめ細かな指導がなされる」で、「よくあった」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。




※BC調査では、「覚えていない」を選択肢に設けていない。

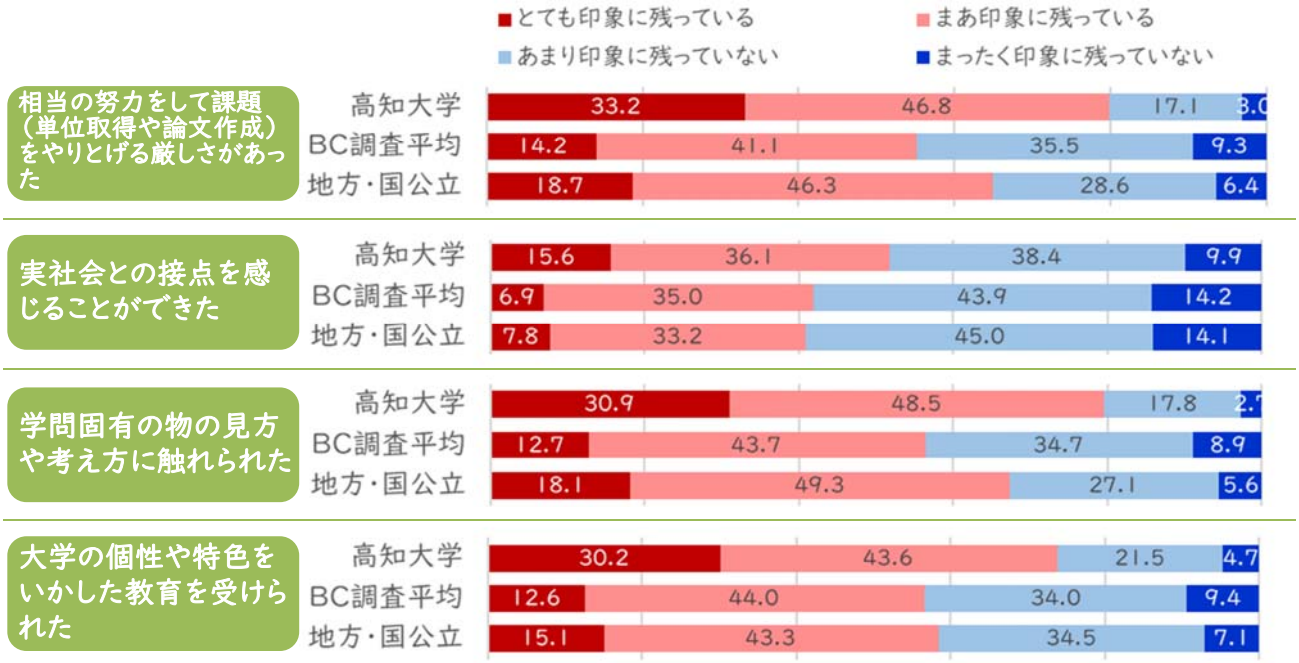
少人数、教員との双方向、きめ細やかな指導など、教員から手厚い指導を受けている。
知識の活用、職業に直結する知識、協働的な学びなど、実践的な学修が多いのも特徴



## ◆大学教育の印象①



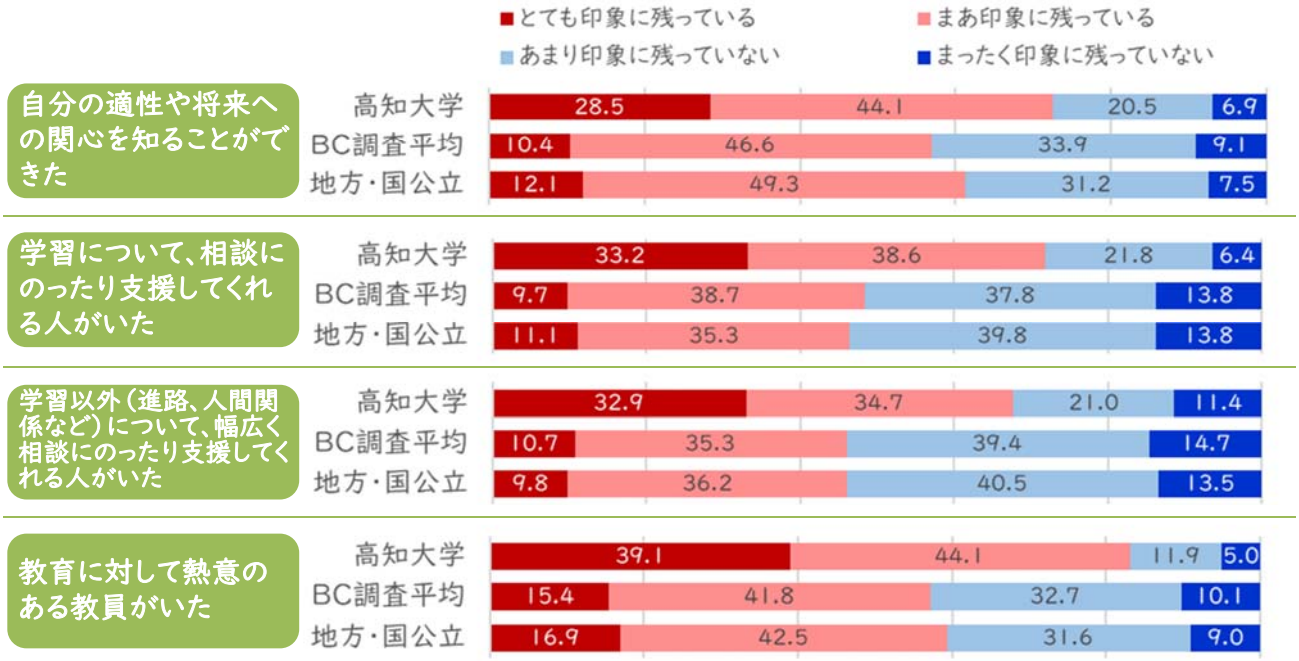
●「課題をやりとげる厳しさ」「実社会との接点」「学問固有のものの見方」「大学の個性や特色」のいずれでも、「とても印象に残っている」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。



## ◆大学教育の印象②



● 「自分の適性や将来への関心」「学習、学習以外で相談に乗ってくれる人」「熱意のある教員」のいずれでも、「とても印象に残っている」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。

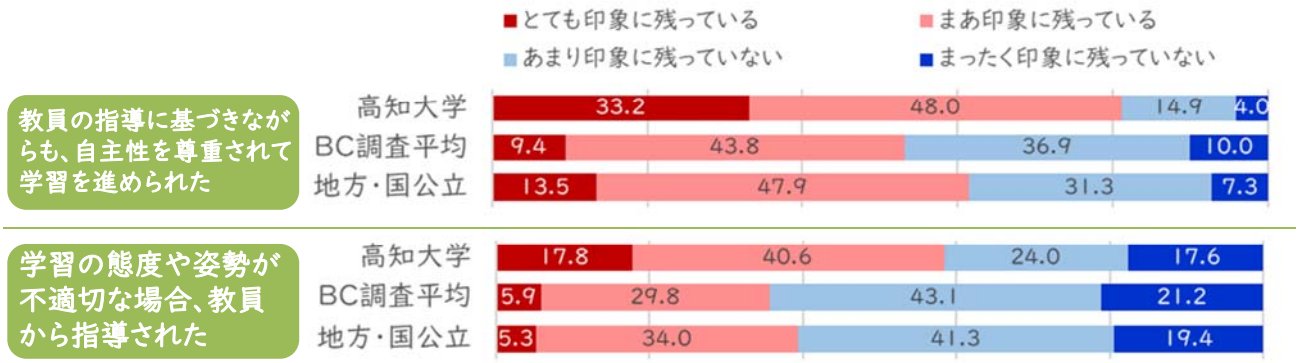



高知大学 Kochi University　ベネッセ教育総合研究所

## ◆大学教育の印象③



● 「自主性を尊重されて学習」「態度・姿勢が不適切な場合の指導」のいずれでも、「とても印象に残っている」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。



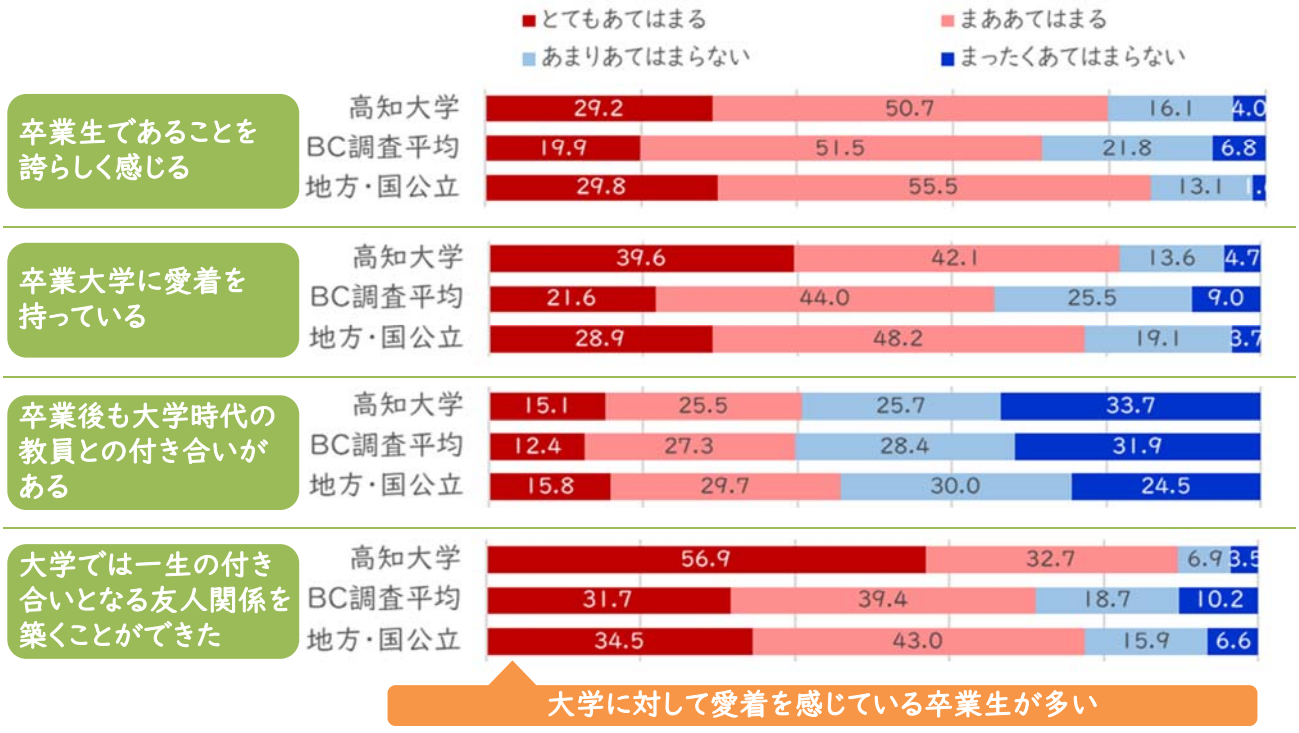

すべての項目で「印象に残っている」の比率が高く、
充実した学びを経験していたことがうかがえる

# ◆成長実感

● 大学での成長実感について「とても成長した」「まあ成長した」の合計は9割超
●全国平均や他の地方･国立大学と比べても肯定率は高い。

# ◆大学について①

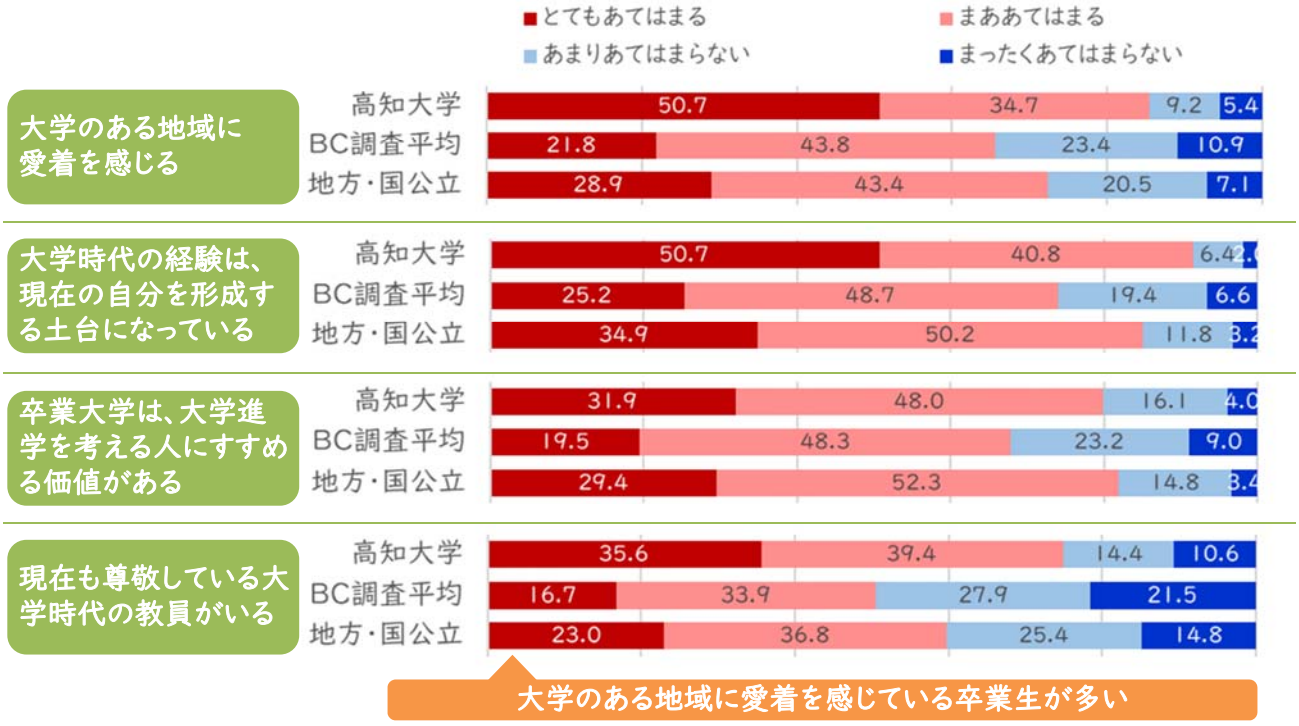
●「卒業大学に愛着を持っている」「大学では一生の付き合いとなる友人関係を築くことができた」で、「とてもあてはまる」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。



## ◆大学について②



●「大学のある地域に愛着を感じる」「大学時代の経験は、現在の自分を形成する土台になっている」「現在も尊敬している大学時代の教員がいる」で、「とてもあてはまる」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。

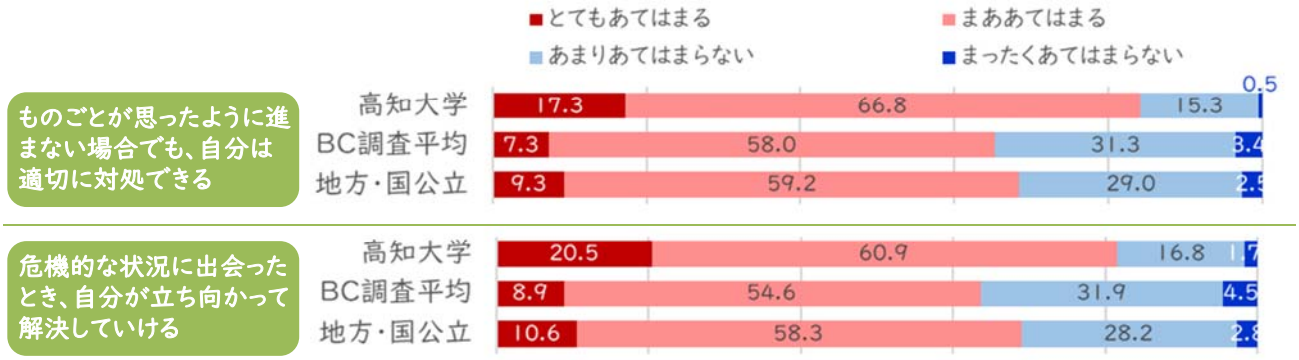





## ◆卒業後の状況（自己効力感）



●「ものごとが思ったように進まない場合でも、自分は適切に対処できる」「危機的な状況に出会ったとき、自分が立ち向かって解決していける」のいずれも、肯定的な回答が多い。



## ◆先行調査との比較のまとめ①



●全体に、**データからは学修に前向きに取り組み、学修成果を上げている**様子がよく表れている。先行調査（BC調査）と比較したときの高知大学の卒業生の特徴は、以下の通りである。

- 大学進学理由では、「資格や免許が取得できる」「将来就きたい職業につながる」が全国平均よりも高く、実学志向が強い。
- 大学志望度では、「第一志望」の比率がBC調査の平均よりも約5ポイント、地方･国公立平均よりも約9ポイント低い。「第三志望以下」の比率が高い。
- 大学での取り組みについては、「ゼミ、研究室活動」「卒業論文や卒業研究」「授業以外の自主的な勉強」のいずれも、「熱心に取り組んだ」は全国平均、地方･国公立大学平均を上回っており、学修熱心な学生が多い。
- 学問の経験では、「実習や体験活動など、学んだ知識を実際に活かす」「教科書の枠にとらわれず、教員の自由な知見・見解に触れる」「学生が協働して学ぶ」「少人数で学ぶ」「研究テーマの選択において、自主性が尊重される」「教員と学生とで双方向のやりとりがある」「研究や論文を進める過程で、教員からきめ細かな指導がなされる」などで、「よくあった」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。全体にきめ細やかな指導を受け、学問に対して多くのことを経験している。
- 大学教育の印象については、「課題をやりとげる厳しさ」「実社会との接点」「学問固有のものの見方」「大学の個性や特色」「自分の適性や将来への関心」「学習、学習以外で相談に乗ってくれる人」「熱意のある教員」「自主性を尊重されて学習」「態度・姿勢が不適切な場合の指導」のいずれでも、「とても印象に残っている」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。充実した大学教育を受けている様子がうかがえる。



## ◆先行調査との比較のまとめ②



（前頁からの続き）

- 成長実感は、「とても成長した」「まあ成長した」の合計が9割超で、全国平均や他の地方国立大学と比べて高い。ほとんどの学生が、大学教育を受けて成長した実感をもっている。
- 大学についての意識では、「卒業大学に愛着を持っている」「大学では一生の付き合いとなる友人関係を築くことができた」「大学のある地域に愛着を感じる」「大学時代の経験は、現在の自分を形成する土台になっている」「現在も尊敬している大学時代の教員がいる」で、「とてもあてはまる」が全国平均、地方･国公立大学平均を上回る。大学や地域に対する愛着・つながりが強い傾向が見られる。
- 卒業後の状況では、「ものごとが思ったように進まない場合でも、自分は適切に対処できる」「危機的な状況に出会ったとき、自分が立ち向かって解決していける」のいずれも、肯定的な回答が多い。自己効力感が高い卒業生が多い。

●データでは全国平均や国公立大学平均を大きく下回る項目は見られないが、**学問の経験について、平均と同等かわずかに下回る項目があり、課題**と言えるかもしれない。それらは、以下のような項目である。

- 学問の経験について、「異なる学問領域が連携した授業がある」「教育を通して、最先端の研究成果に触れる」「最新の時事問題や企業の状況などを学ぶ」などがわずかに低い。実学志向が高い分だけ、先端の教育に対する満足度が低い可能性がある。

【Contents】

1　研究の目的・調査の概要

2　先行調査(ベネッセ調査)との比較

3　卒業生調査の詳細分析

4　まとめ―成果と課題



## ◆単純集計の結果



●単純集計の結果は、高知大学のWEBサイトで公開している。

◆トップページ
https://fdas.kochi-u.ac.jp/kuap/

◆平成30年度卒業生調査結果
https://fdas.kochi-u.ac.jp/kuap/2020/images/H30sotugyouseityousa.pdf

こちらから

# ◆卒業後の状況を規定する要因の検討



●以下のページでは、**大学での取り組みや学問の経験、身についた資質・能力などが大学卒業後の状況（自己効力感）にどのような影響を与えているのか**を分析する。

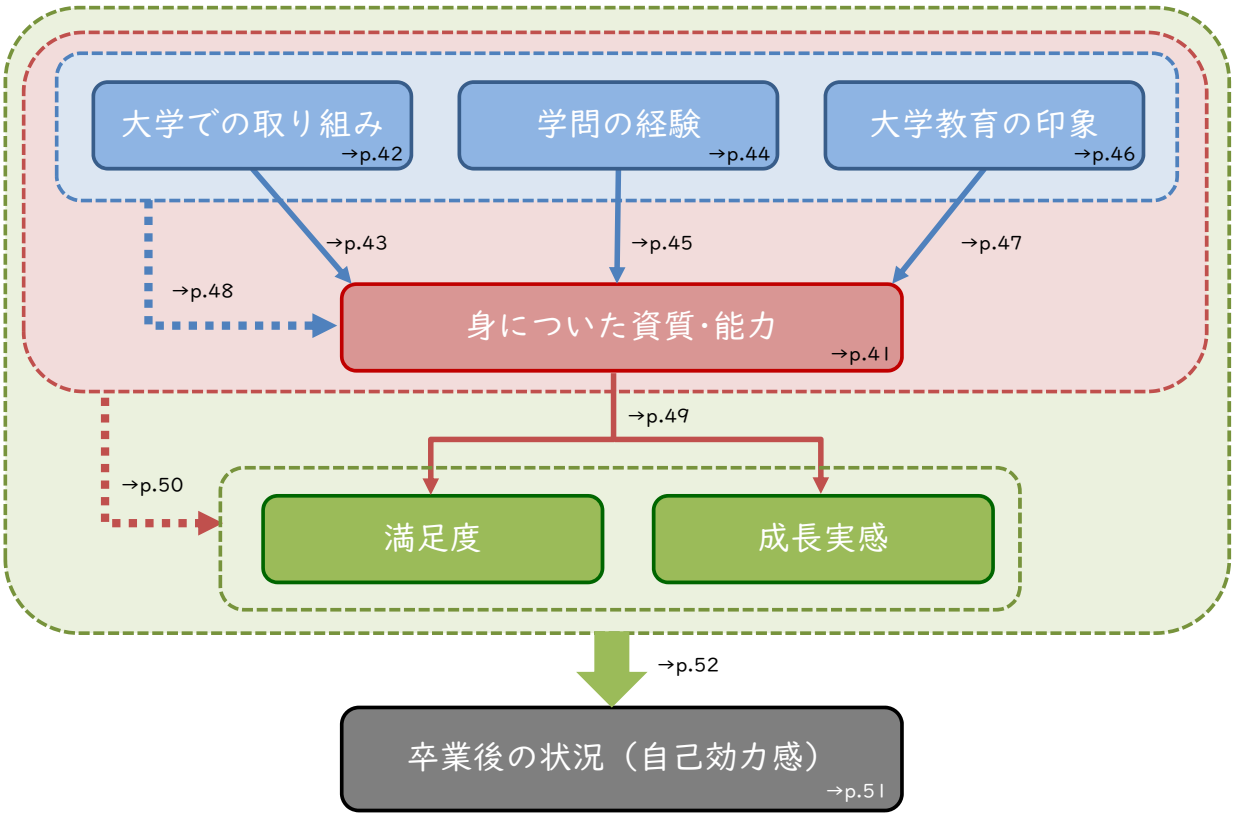
●分析を通して、**学生が卒業後に活躍するためにどのような教育施策が有効なのか**を考察する。


●分析の全体像 …… p.40
●身についた資質･能力（因子分析） …… p.41
●大学での取り組み（因子分析） …… p.42
●大学での取り組みの効果（重回帰分析） …… p.43
●学問の経験（因子分析） …… p.44
●学問の経験の効果（重回帰分析） …… p.45
●大学教育の印象（因子分析） …… p.46
●大学教育の印象の効果（重回帰分析） …… p.47
●資質･能力を規定する要因（まとめ） …… p.48
●身についた資質･能力の効果（重回帰分析） …… p.49
●満足度･成長実感を規定する要因（重回帰分析） …… p.50
●卒業後の状況（因子分析） …… p.51
●卒業後の状況を規定する要因（重回帰分析） …… p.52
●考察 …… p.53
●補足①/補足② …… p.54




# ◆分析の全体像





# ◆身についた資質・能力（因子分析）



●身についた資質・能力15項目に関して探索的因子分析を行った。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性測度0.916、Bartlett の球面性検定$\chi^2(105)=3307.509$, $p<.001$
因子数はKaiser-Guttman基準から2とした

●身についた資質・能力の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

| | 因子 | | 共通性 |
|---|---|---|---|
| | 協働的解決力 | 論理的思考・実行力 | |
| 予想外のことや困難な状況に出会っても、周囲と協力するなどして、適切に対応する力 | 0.848 | 0.004 | 0.724 |
| チームでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもって発言・行動する力 | 0.835 | -0.016 | 0.679 |
| 異なる立場や考え方を持つ人々と協力関係を作って物事を進める力 | 0.790 | 0.022 | 0.648 |
| 周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせて、他者に働きかける力 | 0.758 | 0.062 | 0.642 |
| 複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力 | 0.724 | 0.038 | 0.562 |
| 自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力 | 0.625 | 0.051 | 0.437 |
| 社会人としての倫理観 | 0.514 | 0.173 | 0.414 |
| 相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力 | 0.418 | 0.369 | 0.518 |
| ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力 | -0.122 | 0.969 | 0.794 |
| 課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力 | -0.004 | 0.869 | 0.752 |
| 相手にわかりやすく話す力・文章を作成するなどの表現力 | 0.259 | 0.453 | 0.429 |
| 大学の教育（共通教育）で学んだ人類の文化・社会・自然に関する基礎的知識 | 0.150 | 0.396 | 0.259 |
| 大学で専攻した専門分野に関する知識や能力 | 0.188 | 0.368 | 0.264 |
| パソコン等の使い方などの情報に関する知識 | 0.125 | 0.356 | 0.203 |
| 英語等の語学に関する知識 | 0.211 | 0.242 | 0.172 |
| 因子間相関 | - | 0.672 | |

因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法($k$=3)

●各因子で負荷量が0.4以下の項目を除外し、「予想外のことや困難なことに出会っても～」以下8項目を**協働的解決力**、「ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力」以下3項目を**論理的思考・実行力**として、合計得点を算出する。



# ◆大学での取り組み（因子分析）



●大学での取り組み11項目に関して探索的因子分析を行った。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性測度0.641、Bartlett の球面性検定$\chi^2(55)=670.599$, $p<.001$
因子数はKaiser-Guttman基準から4とした

●大学での取り組みの因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

| | 因子 | | | | 共通性 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 正課学修 | サークル | 正課外学修 | 社会活動 | |
| ゼミ、研究室活動 | 0.995 | 0.038 | -0.012 | -0.059 | 0.958 |
| 卒業論文や卒業研究 | 0.785 | -0.050 | -0.020 | 0.041 | 0.626 |
| 専門以外の授業（教養や他学部の授業など） | 0.340 | -0.004 | 0.257 | 0.082 | 0.273 |
| サークルや部活動 | -0.013 | 0.933 | 0.012 | 0.013 | 0.875 |
| 授業以外の自主的な勉強（資格試験など） | -0.007 | 0.014 | 0.784 | -0.085 | 0.596 |
| 地域・社会活動（NPO活動、ボランティアなど） | 0.057 | 0.001 | 0.335 | 0.170 | 0.184 |
| インターンシップ | -0.010 | -0.047 | -0.026 | 0.613 | 0.367 |
| 就職活動 | -0.027 | 0.107 | 0.032 | 0.389 | 0.169 |
| アルバイト | 0.063 | -0.069 | -0.007 | 0.301 | 0.105 |
| 留学 | -0.065 | -0.045 | 0.151 | 0.293 | 0.113 |
| よさこい | 0.062 | 0.137 | -0.084 | 0.281 | 0.106 |
| 因子間相関 | - | -0.036 | 0.372 | 0.219 | |
| | | - | 0.061 | 0.056 | |
| | | | - | 0.184 | |

因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法（$k$=5）

●各因子に負荷量が小さい項目が含まれることから、特徴的な結果を示す「ゼミ、研究室活動」（以下、**正課学修**と表記）、「サークルや部活動」（以下、**サークル**と表記）、「授業以外の自主的な勉強」（以下、**正課外学修**と表記）、「インターンシップ」（以下、**社会活動**と表記）を単独で用いる。

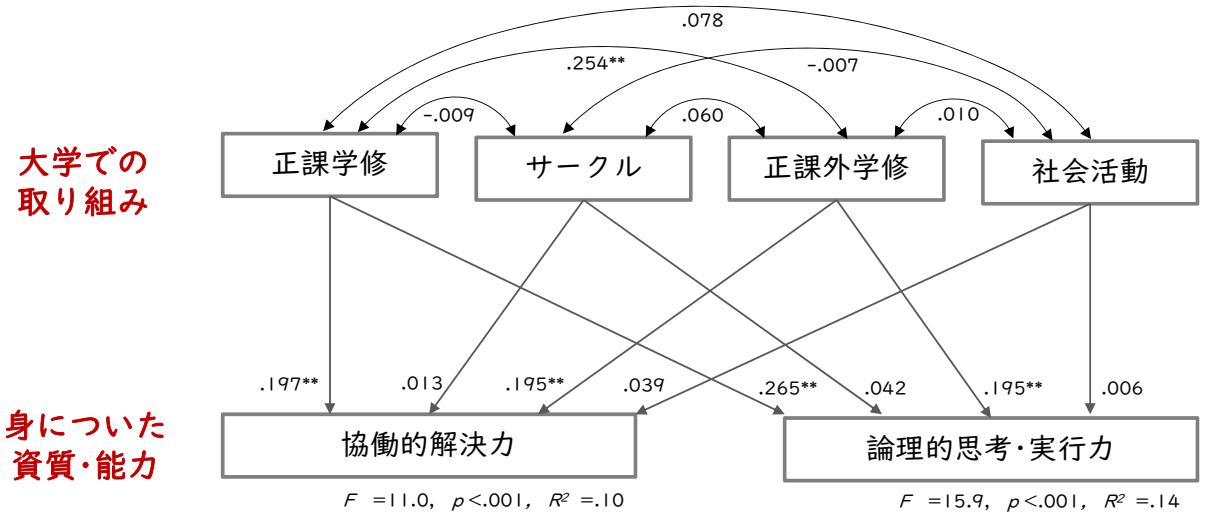
# ◆大学での取り組みの効果（重回帰分析）



●大学での取り組みが身についた資質・能力に与える効果について重回帰分析を行った。

線形回帰分析（強制投入法）

●身についた資質・能力を被説明変数とする重回帰分析（標準偏回帰係数）　＊＊$p$<.01




●正課学修（ゼミ、研究室活動）と正課外学修（授業以外の自主的な勉強）のいずれも、協働的解決力や論理的思考・実行力にプラスの効果を有している。



# ◆学問の経験（因子分析）



●学問の経験15項目に関して探索的因子分析を行った。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性測度0.879、Bartlett の球面性検定 $\chi^2(105)=1818.465$, $p<.001$
因子数はKaiser-Guttman基準から3とした

●学問の経験の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

| | 因子 | | | 共通性 |
|---|---|---|---|---|
| | 知識獲得・活用 | 学修環境 | 研究・論文指導 | |
| 将来の職業に直結する知識を学ぶ | 0.724 | -0.135 | -0.003 | 0.414 |
| 実習や体験活動など、学んだ知識を実際に活かす | 0.680 | -0.042 | 0.108 | 0.481 |
| 試験や課題を通すには、相当の努力が求められる | 0.559 | 0.111 | -0.045 | 0.385 |
| 教育を通して、最先端の研究成果に触れる | 0.552 | 0.079 | -0.028 | 0.356 |
| 学生が協働（グループワークや相互評価など）して学ぶ | 0.358 | 0.277 | -0.010 | 0.329 |
| 異なる学問領域が連携した授業がある | 0.342 | 0.197 | -0.039 | 0.227 |
| 自分の考えを徹底して深める | 0.339 | 0.301 | 0.091 | 0.400 |
| 少人数で学ぶ | -0.021 | 0.790 | -0.182 | 0.467 |
| 教員と学生とで双方向のやりとりがある | 0.014 | 0.622 | 0.153 | 0.538 |
| 教科書の枠にとらわれず、教員の自由な知見・見解に触れる | 0.160 | 0.523 | 0.010 | 0.417 |
| 研究テーマの選択において、自主性が尊重される | -0.156 | 0.479 | 0.356 | 0.450 |
| 最新の時事問題や企業の状況などを学ぶ | 0.086 | 0.451 | -0.024 | 0.248 |
| 研究や論文を進める過程で、教員からきめ細かな指導がなされる | -0.105 | -0.046 | 1.004 | 0.903 |
| 研究や論文を進める過程で、上級生（院生）からアドバイスが受けられる | 0.209 | -0.140 | 0.478 | 0.240 |
| 提出した課題や発表に対して、都度教員からの指導がなされる | 0.266 | 0.192 | 0.276 | 0.362 |
| 因子間相関 | - | 0.654 | 0.329 | |
| | | - | 0.597 | |

因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法($k$=6)

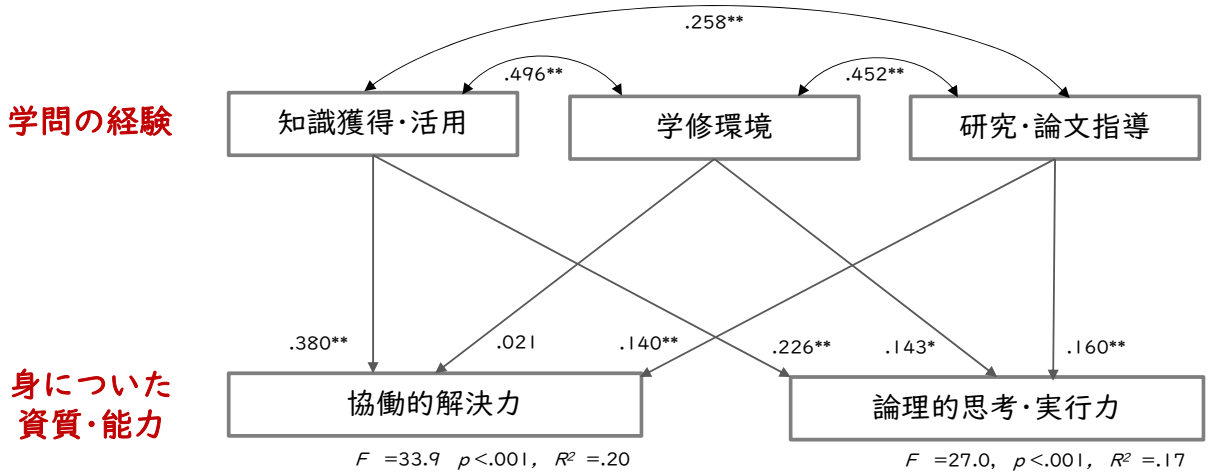
●各因子で負荷量が0.4以下の項目を除外し、「将来の職業に直結する知識を学ぶ」以下4項目を**知識獲得・活用**、「少人数で学ぶ」以下5項目を**学修環境**、「研究や論文を進める過程で、教員からきめ細やかな指導がなされる」以下2項目を**研究・論文指導**として、合計得点を算出する。

# ◆学問の経験の効果（重回帰分析）

●学問の経験が身についた資質・能力に与える効果について重回帰分析を行った。

線形回帰分析（強制投入法）

●身についた資質・能力を被説明変数とする重回帰分析（標準偏回帰係数）　＊＊$p$<.01 ＊$p$<.05




●協働的解決力に対しては知識獲得・活用、研究・論文指導が、論理的思考・実行力に対しては知識獲得・活用、学修環境、研究・論文指導のすべてがプラスの効果を有している。



# ◆大学教育の印象（因子分析）

●大学教育の印象10項目に関して探索的因子分析を行った。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性測度0.891、Bartlett の球面性検定 $\chi^2(45)=1479.630$, $p<.001$
因子数はKaiser-Guttman基準から1とした

●大学教育の印象の因子分析結果（因子行列）

| | 因子<br>大学教育へのプラスの印象 | 共通性 |
|---|---|---|
| 学習について、相談にのったり支援してくれる人がいた | 0.750 | 0.562 |
| 教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて学習を進められた | 0.708 | 0.501 |
| 学習以外（進路、人間関係など）について、幅広く相談にのったり支援してくれる人がいた | 0.695 | 0.482 |
| 教育に対して熱意のある教員がいた | 0.684 | 0.468 |
| 自分の適性や将来への関心を知ることができた | 0.657 | 0.431 |
| 学問固有の物の見方や考え方に触れられた | 0.622 | 0.387 |
| 実社会との接点を感じることができた | 0.606 | 0.368 |
| 相当の努力をして課題（単位取得や論文作成）をやりとげる厳しさがあった | 0.568 | 0.323 |
| 大学の個性や特色をいかした教育を受けられた | 0.568 | 0.323 |
| 学習の態度や姿勢が不適切な場合、教員から指導された | 0.420 | 0.176 |

因子抽出法: 最尤法

●因子分析の結果が1因子となったため、10項目の信頼性係数（Cronbach のアルファ）を算出したところ0.865となったため、全10項目を**大学教育へのプラスの印象**として、合計得点を算出する。

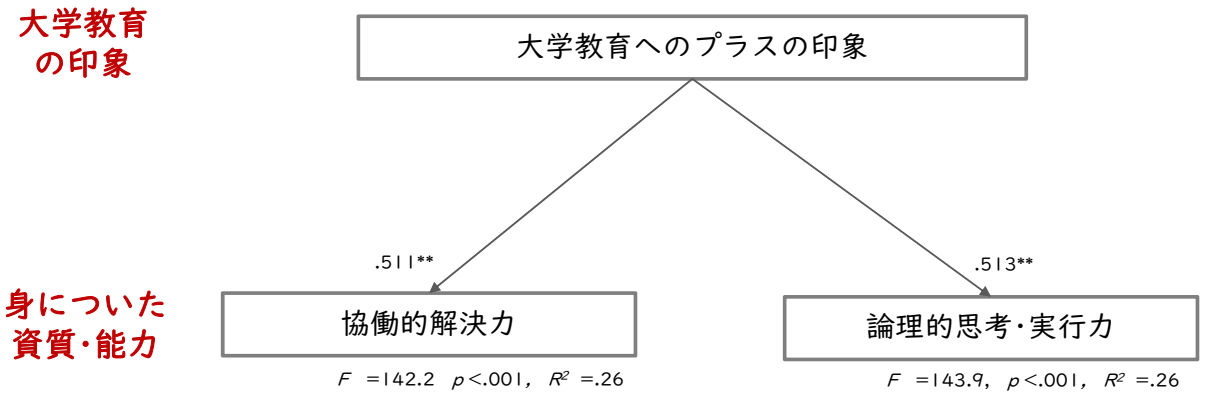
# ◆大学教育の印象の効果（単回帰分析）



●大学教育へのプラスの印象が身についた資質・能力に与える効果について単回帰分析を行った。

線形回帰分析（強制投入法）

●身についた資質・能力を被説明変数とする単回帰分析（標準偏回帰係数）　　＊＊$p$<.01




●大学教育へのプラスの印象は、協働的解決力に対しても論理的思考・実行力に対してもプラスの効果を有している。



# ◆資質・能力を規定する要因（まとめ）



●大学での取り組み、学問の経験、大学教育へのプラスの印象のすべての変数を投入し、身についた資質・能力に与える効果について重回帰分析を行った。

線形回帰分析（強制投入法）

●身についた資質・能力を被説明変数とする重回帰分析　　＊＊＊$p$<.001 ＊＊$p$<.01 ＊$p$<.05

| 被説明変数→ | | 協働的解決力 | | | | 論理的思考・実行力 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 非標準化係数 | | 標準化係数 | 有意確率 | 非標準化係数 | | 標準化係数 | 有意確率 |
| | | B | 標準誤差 | ベータ | | B | 標準誤差 | ベータ | |
| | (定数) | 10.413 | 1.362 | | *** | 3.354 | 0.535 | | *** |
| 大学での取り組み | 正課学修 | 0.350 | 0.225 | 0.079 | | 0.216 | 0.088 | 0.125 | * |
| | サークル | -0.152 | 0.134 | -0.048 | | -0.002 | 0.053 | -0.001 | |
| | 正課外学修 | 0.459 | 0.200 | 0.103 | * | 0.225 | 0.078 | 0.129 | ** |
| | 社会活動 | 0.131 | 0.136 | 0.041 | | -0.006 | 0.053 | -0.005 | |
| 学問の経験 | 知識獲得・活用 | 0.371 | 0.100 | 0.205 | *** | 0.018 | 0.039 | 0.025 | |
| | 学修環境 | -0.182 | 0.087 | -0.116 | * | -0.003 | 0.034 | -0.004 | |
| | 研究・論文指導 | 0.071 | 0.163 | 0.023 | | 0.027 | 0.064 | 0.022 | |
| 大学教育の印象 | 大学教育へのプラスの印象 | 0.319 | 0.050 | 0.394 | *** | 0.132 | 0.020 | 0.417 | *** |
| | | $R^2$=.31 | $Adj.R^2$=.30 | $F$=22.1 | $p$<.001 | $R^2$=.30 | $Adj.R^2$=.29 | $F$=21.3 | $p$<.001 |

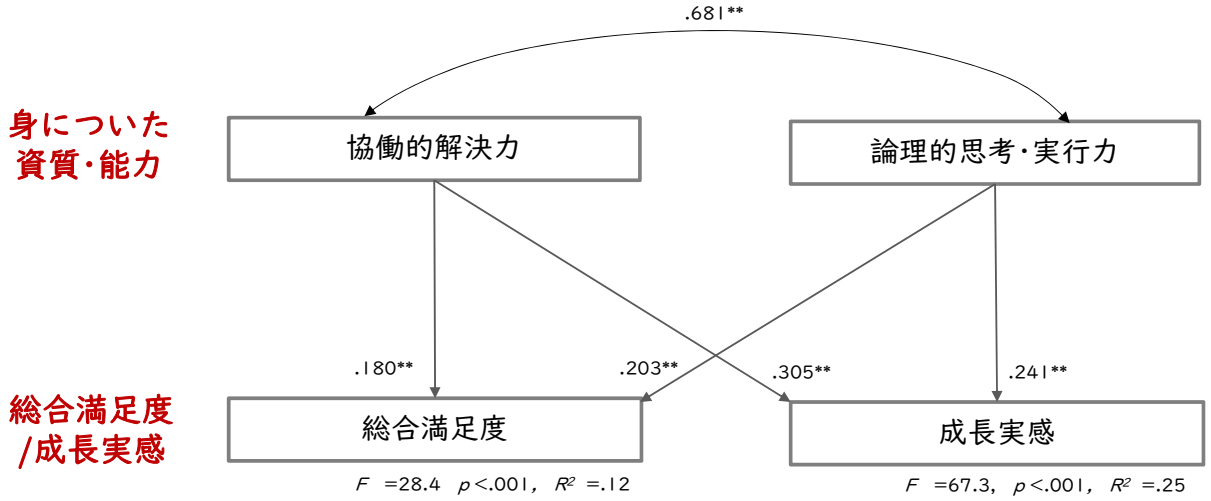
●協働的解決力に対しては正課外学修、知識獲得・活用、大学教育へのプラスの印象が、論理的思考・実行力に対しては正課学修、正課外学修、大学教育へのプラスの印象が、プラスの効果を有している。

# ◆身についた資質・能力の効果（重回帰分析）



●身についた資質・能力が大学への総合的な満足度（総合満足度）、大学教育を通じた成長の実感（成長実感）に与える効果について重回帰分析を行った。　線形回帰分析（強制投入法）

●総合満足度/成長実感を被説明変数とする重回帰分析（標準偏回帰係数）　＊＊$p$<.01 ＊$p$<.05




●総合満足度に対しても成長実感に対しても、協働的解決力と論理的思考・実行力はプラスの効果を有している。ただし、成長実感に与える効果のほうが大きい。



# ◆満足度・成長実感を規定する要因



●大学への総合的な満足度（総合満足度）、大学教育を通じた成長の実感（成長実感）を規定する要因について重回帰分析を行った。

線形回帰分析（強制投入法）

●総合満足度/成長実感を被説明変数とする重回帰分析　＊＊＊$p$<.001 ＊＊$p$<.01 ＊$p$<.05

| 被説明変数→ | | 総合満足度 | | | | 成長実感 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 非標準化係数 | | 標準化係数 | 有意確率 | 非標準化係数 | | 標準化係数 | 有意確率 |
| | | B | 標準誤差 | ベータ | | B | 標準誤差 | ベータ | |
| | (定数) | 1.631 | 0.198 | | *** | 1.095 | 0.191 | | *** |
| 大学での取り組み | 正課学修 | 0.047 | 0.031 | 0.082 | | 0.080 | 0.030 | 0.136 | ** |
| | サークル | 0.026 | 0.018 | 0.063 | | 0.060 | 0.018 | 0.144 | ** |
| | 正課外学修 | -0.078 | 0.027 | -0.134 | ** | -0.064 | 0.026 | -0.109 | * |
| | 社会活動 | -0.031 | 0.018 | -0.074 | | 0.004 | 0.018 | 0.010 | |
| 学問の経験 | 知識獲得・活用 | 0.001 | 0.014 | 0.003 | *** | 0.008 | 0.013 | 0.032 | |
| | 学修環境 | 0.000 | 0.012 | -0.001 | * | 0.002 | 0.011 | 0.010 | |
| | 研究・論文指導 | 0.004 | 0.022 | 0.009 | | -0.006 | 0.021 | -0.015 | |
| 大学教育の印象 | 大学教育へのプラスの印象 | 0.039 | 0.007 | 0.375 | *** | 0.021 | 0.007 | 0.197 | ** |
| 身についた資質・能力 | 協働的解決力 | 0.011 | 0.008 | 0.083 | | 0.032 | 0.008 | 0.241 | *** |
| | 論理的思考・実行力 | 0.027 | 0.021 | 0.082 | | 0.052 | 0.020 | 0.152 | * |
| | | $R^2$=.26 $Adj.R^2$=.24 $F$=13.5 $p$<.001 | | | | $R^2$=.34 $Adj.R^2$=.32 $F$=19.8 $p$<.001 | | | |

●総合満足度に対しては、正課外学修、知識獲得・活用、学修環境、大学教育へのプラスの印象が、成長実感に対しては、正課学修、サークル、正課外学修、大学教育へのプラスの印象、協働的解決力、論理的思考・実行力がプラスの効果を有している。

# ◆卒業後の状況（因子分析）



●卒業後の状況6項目に関して探索的因子分析を行った。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性測度0.854、Bartlett の球面性検定 $\chi^2(15)=1105.573$, $p<.001$
因子数はKaiser-Guttman基準から1とした

●卒業後の状況の因子分析結果（因子行列）

| | 因子<br>卒業後の自己効力感 | 共通性 |
|---|---|---|
| 今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる | 0.793 | 0.629 |
| 危機的な状況に出会ったとき、自分が立ち向かって解決していける | 0.759 | 0.576 |
| ものごとが思ったように進まない場合でも、自分は適切に対処できる | 0.739 | 0.546 |
| 将来、職場で活躍できる人材になる自信がある | 0.712 | 0.507 |
| 現在の仕事に必要な能力を備えている | 0.707 | 0.500 |
| 現在の仕事ぶりに満足している | 0.600 | 0.360 |

因子抽出法: 最尤法

●因子分析の結果が1因子となったため、6項目の信頼性係数（Cronbach のアルファ）を算出したところ0.860となったため、全6項目を**卒業後の状況（自己効力感）**として、合計得点を算出する。



# ◆卒業後の状況を規定する要因



●卒業後の状況（自己効力感）を規定する要因について、大学での取り組み（モデル①）、学問の経験（モデル②）、大学教育の印象（モデル③）、身についた資質・能力（モデル④）、満足度・成長実感（モデル⑤）を順次投入して重回帰分析を行った。　線形回帰分析（強制投入法）

●卒業後の状況（自己効力感）を被説明変数とする重回帰分析　　＊＊＊$p<.001$ ＊＊$p<.01$ ＊$p<.05$

| | | モデル① | | | モデル② | | | モデル③ | | | モデル④ | | | モデル⑤ | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 非標準化係数 B | 標準化係数 ベータ | 有意確率 | 非標準化係数 B | 標準化係数 ベータ | 有意確率 | 非標準化係数 B | 標準化係数 ベータ | 有意確率 | 非標準化係数 B | 標準化係数 ベータ | 有意確率 | 非標準化係数 B | 標準化係数 ベータ | 有意確率 |
| | (定数) | 12.049 | | *** | 9.539 | | *** | 9.232 | | *** | 5.305 | | *** | 5.187 | | *** |
| 性別 | 男子ダミー | 1.182 | 0.175 | *** | 1.118 | 0.166 | ** | 1.176 | 0.174 | *** | 1.139 | 0.169 | *** | 1.141 | 0.169 | *** |
| 大学での取り組み | 正課学修 | 0.426 | 0.135 | ** | 0.220 | 0.069 | | 0.185 | 0.058 | | 0.011 | 0.003 | | -0.007 | -0.002 | |
| | サークル | 0.203 | 0.089 | | 0.166 | 0.073 | | 0.144 | 0.064 | | 0.185 | 0.081 | | 0.170 | 0.075 | |
| | 正課外学修 | 0.524 | 0.165 | ** | 0.459 | 0.144 | ** | 0.397 | 0.125 | * | 0.194 | 0.061 | | 0.203 | 0.064 | |
| | 社会活動 | 0.129 | 0.056 | | 0.133 | 0.058 | | 0.119 | 0.052 | | 0.087 | 0.038 | | 0.082 | 0.036 | |
| 学問の経験 | 知識獲得・活用 | | | | 0.167 | 0.130 | * | 0.053 | 0.041 | | -0.046 | -0.036 | | -0.048 | -0.037 | |
| | 学修環境 | | | | 0.061 | 0.054 | | -0.007 | -0.006 | | 0.040 | 0.036 | | 0.040 | 0.036 | |
| | 研究・論文指導 | | | | 0.119 | 0.054 | | 0.025 | 0.011 | | -0.004 | -0.002 | | -0.002 | -0.001 | |
| 大学教育の印象 | 大学教育へのプラスの印象 | | | | | | | 0.127 | 0.220 | ** | -0.005 | -0.009 | | -0.006 | -0.011 | |
| 身についた資質・能力 | 協働的解決力 | | | | | | | | | | 0.250 | 0.351 | *** | 0.242 | 0.340 | *** |
| | 論理的思考・実行力 | | | | | | | | | | 0.396 | 0.217 | *** | 0.384 | 0.210 | ** |
| 満足度・成長実感 | 総合満足度 | | | | | | | | | | | | | -0.131 | -0.024 | |
| | 成長実感 | | | | | | | | | | | | | 0.303 | 0.056 | |
| | | $R^2$=.10 $Adj.R^2$=.09 $F$=9.1 $p$<.001 | | | $R^2$=.13 $Adj.R^2$=.12 $F$=7.6 $p$<.001 | | | $R^2$=.16 $Adj.R^2$=.14 $F$=8.0 $p$<.001 | | | $R^2$=.33 $Adj.R^2$=.31 $F$=17.6 $p$<.001 | | | $R^2$=.33 $Adj.R^2$=.31 $F$=15.1 $p$<.001 | | |

# ◆考察

●卒業後の状況（自己効力感）にプラスの効果を持つのは、身についた資質・能力（協働的解決力/論理的思考・実行力）である。大学在学中にいかに資質・能力を高めるかが、卒業後に活躍するうえでの基礎になる。（→p.52）

●資質・能力を高めることは、大学への満足度や成長実感の向上につながる。（→p.49） とくに、成長実感の向上に対しては直接的な効果を有する。（→p.50）

●資質・能力の向上には、大学での取り組み（→p.43）、学問の経験（→p.45）、大学教育の印象（→p.47）のいずれにもプラスの効果がある。資質・能力の向上には、こうした大学教育の充実が欠かせない。

●大学教育が充実し、プラスの印象を持っていることが、協働的解決力にも論理的思考・実行力にも効果を有している。（→p.48）

●周囲と協力しながら課題に対処する協働的解決力を高めるには、学問の経験、とくに知識獲得・活用が効果を持つ。（→p.48） 職業に直結する知識を学んだり、実習や活動などで知識を生かす体験が重要である。

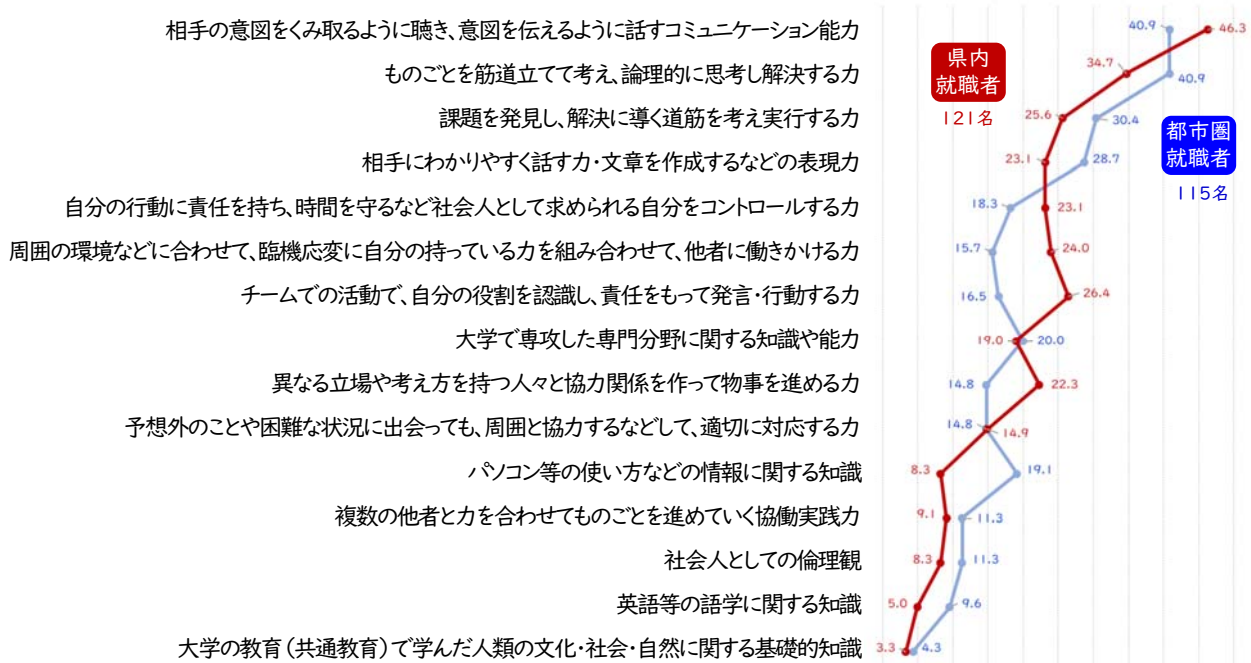
●物事を筋道立てて考えて解決するような論理的思考・実行力を高めるには、ゼミ・研究室活動などの正課学修と授業以外の自主的な勉強（資格試験）などの正課外学修が効果を持つ。（→p.48） 学修活動の充実により、思考力や実行力を高めることが重要である。



# ◆【補足①】重要と考える資質・能力

●県内就職者は「コミュニケーション能力」「チーム活動で役割を認識」の選択率が高い。
●都市圏就職者は「論理的に思考し解決する力」「パソコン等に関する知識」の選択率が高い。

**Q：卒業後の経験に照らして最も重要だと考える能力を、15の能力から選択してください（3つ選択）**




※都市圏は、東京、千葉、埼玉、神奈川、愛知、大阪、京都、兵庫、福岡の各都府県の居住者。その他の地域への就職者168名は図から省略した。

# ◆【補足②】重要と考える資質・能力



●就職先地域差の仮説検証……「経験に照らして最も重要と考える能力」の差異

●インタビュー調査では、高知県と首都圏で、企業の卒業生に対する期待に大きな違いがみられた。
→高知では、「人間としての幅を広げる・人間力を高める」ための経験・学びへの要望が高い。
→首都圏では、「職場で求められるスキル・能力につながる」ための経験・学びへの要望が高い。

●（仮説）卒業生が大学教育に求めることも、高知県と首都圏では異なっている。

●（検証）「経験に照らして最も重要と考える能力」について、高知県内に就職した卒業生と都市圏に就職した卒業生の差異を確認する。（→p.54の図を参照）

●（結果）両者には以下のような差異が見られる。

→高知県内に就職した卒業生の比率が高い項目
- ・相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力
- ・自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力
- ・周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせて、他者に働きかける力
- ・チームでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもって発言・行動する力
- ・異なる立場や考え方を持つ人々と協力関係を作って物事を進める力

高知県内就職者

他者との協働や
自己統制・責任
などの項目が高い

→都市圏に就職した卒業生の比率が高い項目
- ・ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力
- ・課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力
- ・相手にわかりやすく話す力・文章を作成するなどの表現力
- ・パソコン等の使い方などの情報に関する知識
- ・複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力
- ・社会人としての倫理観
- ・英語等の語学に関する知識

都市圏就職者

論理的思考や表現力
パソコンや英語スキル
などの項目が高い

高知大学 Kochi University　ベネッセ教育総合研究所

## 【Contents】

1　研究の目的・調査の概要

2　先行調査（ベネッセ調査）との比較

3　卒業生調査の詳細分析

4　まとめ―成果と課題

## ◆研究の成果①



●本研究は、質保証の基盤構築に向けた「地域協働による教育」の多面的評価指標の実証的検証の一環として、高知大学とベネッセ教育総合研究所が共同で行った。（→p.3を参照）

●この共同研究は、学生の学びと成長の可視化のモデルづくりを目的として、卒業生と就職先を対象としたWEBアンケート調査の開発を行った。これにより、卒業生の地域社会での活躍に大学がどれだけ貢献できているのかを測定し、教育施策を改善するためのサイクルをつくることを目指している。（→p.4～5を参照）

●本レポートは、平成29年度に実施した卒業生インタビュー調査を受けて、平成30年度に実施した卒業生へのWEBアンケート調査の結果を分析したものである。調査においては、高知大学が開発した評価の軸となる能力指標（「10+1の力」）（→p.6を参照）を取り入れ、一貫した基準で資質・能力をとらえた。

●調査の回収数は404件、回収率は38.1%であり、AP事業の平成30年度目標である18%を大きく超えることができた。WEBアンケートシステムの構築により、次年度以降の継続的な調査の体制を整えることができた。（→p.7を参照）

(次ページに続く)



## ◆研究の成果②



(前ページから続く)

●先行調査との比較から分かったことは、次のようなことである。（→p.14～36を参照）

・全体に先行調査よりも良好な数値を示す項目が多く、データからは学修に前向きに取り組み、学修成果を上げている様子が表れている。

・全国平均や国公立大学平均を大きく下回る項目はないが、学問の経験についてわずかに下回る項目があり、課題と言えるかもしれない。

●詳細分析からわかったことは、次のようなことである。（→p.37～55を参照）

・大学教育の中で身についた資質・能力が、卒業後の状況（自己効力感）に強い効果を有している。資質・能力は正課・正課外の学修活動のなかで高まっており、大学満足度や成長実感にも影響を与える。

・経験に照らして重要だと考える能力は、高知県内就職者と都市圏就職者で違いがある。前者は他者との協働や自己統制・責任を重要と考え、後者は論理的思考や表現力、職業に必要なスキルを重要と考える傾向がある。

●一貫した評価軸で卒業生の状況をとらえ、大学教育の効果を検証できたことが、本研究の最大の成果と言える。

# ◆今後の課題

●本研究では、卒業生自身による大学在学時のふりかえりと卒業後の状況から、学生の成長の可視化と大学教育の効果検証を試みた。しかし、在学時点で入手している各種の学修データや評価と接続した分析を行うことができていない。

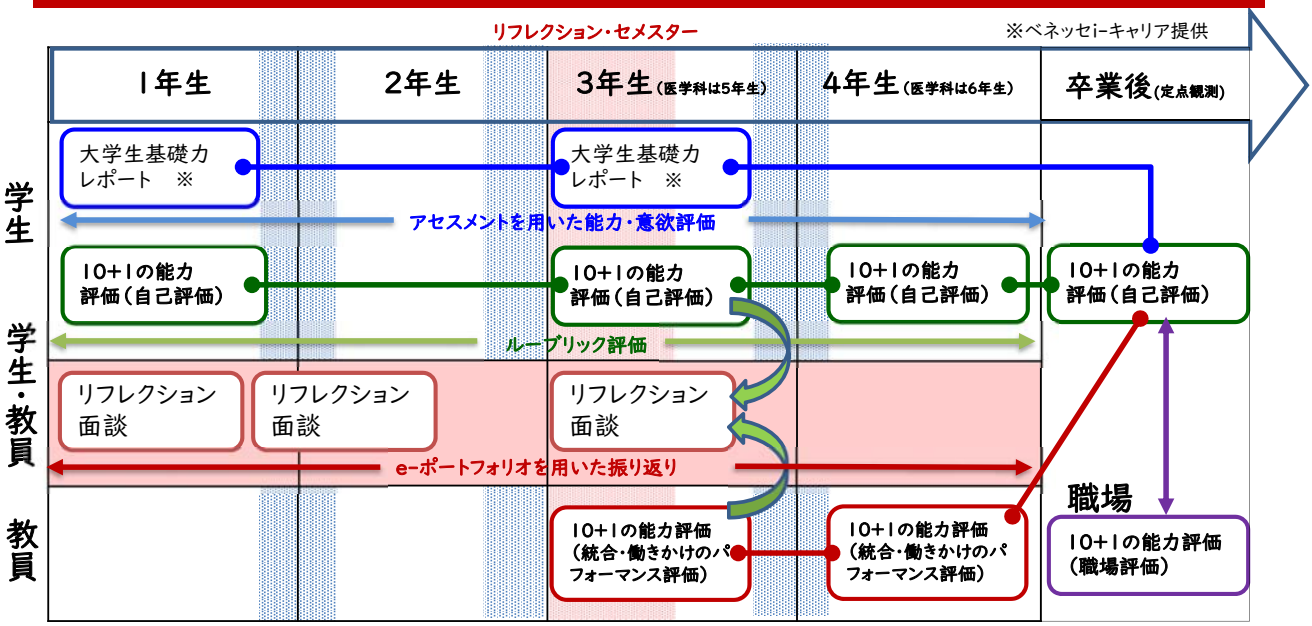
●今後は、次ページ (→p.60) に示した評価の体系化に則って、一人ひとりの学生の入学から卒業後のデータをパネルで管理し、教育施策を評価・改善する仕組みをさらに充実していく必要がある。

●卒業生に対するアンケートは目標を超える回収を得ることができたが、卒業生の就職先に対するアンケートは計量的な分析をするに足る十分な回収をえることができなかった。就職先からの評価をどのように得るのかを検討し、調査方法等の改善を図る必要がある。



# ◆【参考】評価の体系化

## 各評価間および在学時・卒業後の関連を検討する必要




【卒業生調査の機能拡張】

単に卒業生の活躍の実態をとらえるのにとどまらず、将来的には、在学時のデータと関連づけることで教育施策の改善の視点を得る必要がある。